

柳田タンワリ1号窯跡

西出川通常砂防工事(予防)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

1982

石川県立埋蔵文化財センター

柳田タンワリ1号窯跡

西出川通常砂防工事(予防)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、石川^{ほくい}県^{ちゅうぶ}羽^{つば}昨^{せき}市^し柳^{やなぎ}田^の町^{ちやう}14字1番地で発見された、柳田タンワリ1号窯跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名に関しては、発見当初は柳田西出川1号窯跡と仮称したが、所在地の通称名「タンワリ」に従い、本書発刊を機に改名した。
- 3 本調査は西出川通常砂防工事（予防）に係る緊急発掘調査であり、県土木部砂防課の依頼を受けた県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 現地調査は1981年5月19日から同年7月9日にかけて実施し、福島正実（県立埋蔵文化財センター主事）・土上正男（同嘱託）が担当した。
また調査員として宮下栄仁（石川考古学研究会会員）・村井伸行（県立埋蔵文化財センター長期研修生、押水町教委）・今井淳一の各氏、調査作業員として浜下勇吉・紺野富美子・広瀬かず子・川角純子・浜下忠一・浜下きよ子・芳永春江・寺出すや・小林よしひ・今村朝子（以上羽昨市）の協力を得た。
- 5 調査の実施にあたり、石川県土木部砂防課・県羽昨土木事務所・羽昨市教育委員会・小倉建設株式会社・セントラル航業株式会社の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
- 6 出土遺物の整理は石川県埋蔵文化財協会に委託した（計測・トレース 上庄由美子・小谷紀美子・小林なお子・山岸康子・米沢富士枝 遺物復元 勝島栄蔵）。
- 7 柳田テンジク2号窯跡、柳田浅畑1号窯跡、柳田ウワノ1号窯跡、柳田シャコデ1号窯跡採集遺物の計測・トレース、および遺物写真撮影、計測遺物の総括的点検・補足は宮下・福島が行った。
- 8 本書の作製にあたり、吉岡康暢（県立郷土資料館）、藤則雄（金沢大学）の各氏より御教示を賜った。
- 9 本窯跡出土須恵器の胎土分析は三辻利一氏（奈良教育大学）に依頼し玉積を賜った。（付章石川県羽昨古窯跡群および周辺遺跡出土須恵器の胎土分析）
- 10 本書の執筆・編集は、平田天秋（県立埋蔵文化財センター係長）、田嶋明人（同係長）、西野秀和（同主事）をはじめ、センター職員の間言・指導を受け、福島・宮下が行なった。
（I～III、V～VIII章：福島、IV章：福島・宮下、遺物観察表：宮下）宮下氏には調査開始より本書刊行に至るまで一貫して従事していただいた。
- 11 出土遺物・記録資料は県立埋蔵文化財センターが一括して保管しており、今後広範に活用されることを望むものである。

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	位置と環境	4
III	調査方法と経過	6
IV	柳田タンワリ1号窯跡	8
1	立地	8
2	遺構	9
3	遺物	15
4	小結	39
V	柳田ウワノ1号窯跡	40
VI	柳田テンジク2号窯跡	44
VII	柳田浅畑1号窯跡	44
VIII	結語	45
付章 羽咋古窯跡群および周辺遺跡		
	出土須恵器の胎土分析	47
	(奈良教育大学 三辻利一)	

挿 図 目 次

第1図	羽咋地区遺跡分布状況	2
第2図	柳田タンワリ1号窯跡旧河道出土石炭	4
第3図	周辺地域地形図	5
第4図	柳田タンワリ1号窯跡現況測量図	9
第5図	原地形測量図	10
第6図	前庭部・窯体断面実測図	11
第7図	工事法面灰原断面見透し実測図	12
第8図	灰原土層断面図	13・14
第9図	灰原出土遺物(1) 杯蓋	18

第10図	灰原出土遺物(2) 杯蓋	19
第11図	灰原出土遺物(3) 杯蓋	21
第12図	灰原出土遺物(4) 杯身	24
第13図	灰原出土遺物(5) 杯身、皿	25
第14図	灰原出土遺物(6) 杯身、高杯、盤	27
第15図	灰原出土遺物(7) 鉢	28
第16図	灰原出土遺物(8) 甌	30
第17図	灰原出土遺物(9) 長頸瓶、平瓶	32
第18図	灰原出土遺物(10) 横瓶	33
第19図	灰原出土遺物(11) 壺、甕	35・36
第20図	灰原出土遺物(12) 甕	37
第21図	灰原出土遺物(13) 甕、陶馬、陶硯	38
第22図	杯類の口径・器高分布	40
第23図	杯の組成	41
第24図	柳田ウワノ1号窯跡採集遺物	43
第25図	柳田テンジク2号窯跡出土遺物	44
第26図	柳田浅畑1号窯跡採集遺物	45
第27図	柳田シャコデ1号窯跡採集遺物	45

表 目 次

第1表	羽咋地域遺跡地名表	3
第2表	柳田タンワリ1号窯跡(灰原)土層一覧表	12
第3表	柳田ウワノ1号窯採集遺物計測表	42

I 調査に至る経緯

石川県立埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財のより精密な分布状況を把握すべく、昭和54年度から国庫補助を得て五カ年計画で「県内遺跡詳細分布調査事業」を実施している。昭和55年度調査は羽咋市をはじめ県内8市町を調査地区とし実地踏査が行われた。

本窟跡は、1981年3月28日、上記調査のため羽咋市北方に広がる海岸段丘の踏査を行っていたセンター職員により、柳田町地内の砂防工事現場で発見されたものである。発見時、既に砂防堰堤堤体下部コンクリート打ち込み工事を終えており、掘削法面に灰原が露出した状態であった。周囲の状況から、掘削は灰原中央を切断する形でなされたため灰原の過半は消滅、下流側斜面も建設機械により損傷を受けていること、窟体の有無は不明であることを確認した。さらに堰堤下流約40mの工事用道路法面でも灰原を疑わせる黒灰色土の露呈を認めた。

報告を受けたセンターは直ちに事業主体である県土木部砂防課と連絡をとった結果、工事は昭和55年度事業をすでに終了、現在は中断していることを確認、文化財保護法に基づく遺跡発見通知の提出を指導するとともに、今後の取り扱いについて遺漏のないよう申し入れた。4月6日に行なった協議の際、上記工事が「西出川通常砂防工事（予防）」であり、昭和55年度に事業着工、昭和57年度完了予定であること、昭和56年度事業は6月中に発注したい旨の説明があり、本窟跡の緊急発掘調査、および堰堤によって将来土砂の堆積が予測される区域内の遺跡分布調査が必要であることを確認した。4月11日付けで遺跡発見通知がなされるとともに、昭和56年4月11



日付けで土木部砂防課長より石川県立埋蔵文化財センターに調査依頼が提出された。4月14日、工事担当である県羽咋土木事務所との調査打ち合わせを行ない、工事発注期限を考慮、現地調査は5月から6月末までの予定で実施することとなった。

発掘調査は1981年5月19日から同年7月9日まで延33日間実施した。その過程で、窟体はかろうじて破壊を免がれており、土砂堆積範囲より高所に存在することが判明、新たな掘削も行われないことから、保存を図るべく窟体の調査は最小限にとどめた。

報告書刊行は当初昭和57年度の前定であったが、10月に至って、土木部砂防課より事業計画が繰り上がり昭和56年度完了見込みである旨連絡があり、調整の結果、急ぎ本年度刊行となったものである。



第1図 羽咋地区遺跡分布状況 (S = 1/50,000)

第1表 羽咋地域遺跡地名表

No.	名 称	時 代	集No.	No.	名 称	時 代	集No.
1	梅瀬シロク山遺跡			63	柳田うわの遺跡	Y・K	2197
2	箕島遺跡	J・Y・N・H	2037~40	64	宮の山古墳	K	2199
3	茨谷おのおのやかた横穴	K	2045	65	山伏山1号古墳	K	2201
4	子浦子遺跡	J・N・H	2048・68・69	66	2号古墳	K	2202
5	蕨山遺跡	K	2067	67	うわの古墳群(6基)	K	2204
6	七面堂地蔵遺跡	T	2073	68	五郎兵衛山室(3基)	K・/	2210
7	七面堂遺跡	H・/	2072・74	69	ウワノ1号窟	K	
8	子蕨山古墳	K	2066	70	タンワリ1号窟	K	
9	小谷屋横穴群	K	2049	71	テンジク2号窟	K	
10	旧瓦場遺跡	N・H	2070・71	72	浅瀬1号窟	N	
11	聖川寺山横穴群	K	2075	73	テンジク1号窟	K	2213
12	山岸遺跡	N・H	6212	74	古墳、横穴	K	2203
13	吉野原農場遺跡	J	2101	75	セックデン古墳	K	2200
14	むかい山遺跡	N・H	2102	76	柳田古池遺跡	K	2198
15	散田よるみや遺跡	J	2103	77	シャコテ庵寺跡	N	2215
16	小学校前遺跡	J	2104	77	シャコテ遺跡	J・K	
17	深田遺跡	J	2105	78	1号窟	K	
18	金谷遺跡	J	2106	79	寺家遺跡	/	2223
19	金谷古墳群	K	2107	80	チョウエイシ遺跡	J・T	6219
20	石坂嶺山遺跡	K	2139	81	中世墓	/	2224
21	散田おほべ古墳	K	2109	82	大塚寺中世墓(仮)	T	
22	穴谷内横穴	K	2110	83	一ノ宮左衛門遺跡	J	2118
23	金谷川遺跡	K	2114	84	気多古墳	K	2221
24	散田家野遺跡	T	2115	85	若宮屋敷	/	2225
25	コダン遺跡	/	6213	86	一ノ宮郵便局遺跡	Y	2219
26	金谷II遺跡	N・H・T		87	寺家一ノ宮遺跡	K~H	6218
27	金谷山遺跡	/		88	不動寺院跡	/	2220
28	向瀬川床遺跡	J	2136	89	滝古墳群(7基)	K	2229
29	向瀬遺跡	N・H	2137	90	大塚古墳	K	2227
30	向瀬ドウガクホ遺跡	N・H	5077	91	白山神社古墳	K	2226
31	菅原館跡	/	5078	92	さんざん山古墳	K	2241
32	田館跡	/	5079	93	滝・架垣海岸F遺跡	/	2244
33	菅原谷内出遺跡	/	2143	94	滝オーショージ古墳群	K	2236
34	菅原横穴	K	2140	95	滝・架垣海岸E遺跡	/	2243
35	杉野屋あかさか遺跡	T	2147	96	I遺跡	J・/	
36	杉野屋遺跡	K・/	2144・46	97	D遺跡	/	2242
37	杉野屋ろくばわり遺跡	N・H	2145	98	滝白尾塚古墳	K	2228
38	粟生遺跡	K	2148	99	滝・架垣海岸C遺跡	/	2265
39	粟生・新保遺跡(仮)	/		100	B遺跡	/	2264
40	兵庫遺跡	K・/		101	A遺跡	H	2263
41	長者川遺跡	J・Y・K・H	2149~52	102	架垣親王塚古墳	K	2257
42	兵庫遺跡	K	2153	103	滝・架垣海岸G遺跡	/	2266
43	御坊山遺跡(仮)	/		104	H遺跡	/	2267
44	子浦川南遺跡	K	5080	105	架垣岡山古墳群(10基)	K	2245
45	子浦川遺跡	Y	2161	106	観音山古墳	K	2255
46	羽咋高校前遺跡	Y	2154	107	〃	K	2255
47	羽咋藤子塚古墳	K	2155	108	〃 ぜん塚古墳	K	2256
48	〃 大塚古墳	K	2156	109	〃 ところ塚古墳	K	2258
49	大谷塚古墳	K	2157	110	名称未定	N・H	
50	羽咋朝塚古墳	K	2158	111	架垣まつかわ塚タラ跡	/	2259
51	〃 坂塚古墳	K	2159	112	架垣遺跡	H	2262
52	〃 宝塚古墳	K	2160	113	谷内川大塚寺跡、タラ跡(仮)	/	
53	農業倉庫前遺跡	Y	5082	114	千路遺跡	J	2216
54	吉崎・次場遺跡	Y~T	2063・64	115	鹿島路古墳	K	2217
55	次場B遺跡(仮)	H・T		116	名称未定	/	
56	深江遺跡	N・H	2165	117	宿屋古墳群	K	6220
57	上江遺跡	H	6216	118	金丸正部谷遺跡	H	2558
58	釜屋・次場遺跡(仮)	/		119	〃 横穴	K	2257
59	釜屋遺跡	Y・K	6214	120	飯山小学校横穴	K	2173
60	釜屋・新保・備ノ目遺跡	Y	2162	121	〃 戦場谷遺跡	H・/	2176・77
61	寺家祭祀遺跡	J~T	6215	122	中川遺跡	J	2172
62	柳田ヒガシデ1号窟	/	2214	123	〃 中世寺院跡	/	5081

注1 本表は石川県遺跡地図(1980、石川県教育委員会)をもとに、その後センターの実施した詳細分布調査等により発見された遺跡も掲載した。

- 名称項(仮)は発見後間もないため小字名、通称等による表示を検討中のものである。
- 時代項記号は次のとおりである。J:縄文時代 Y:弥生 K:古墳 N:奈良 H:平安 T:中世 /:不詳
- 羽咋市寺家遺跡周辺は最近の調査により遺跡数が増加したため、名称の整理検討が必要である。

II 位置と環境

能登半島の基部に所在する羽咋市は、邑知潟を中心に擁した豊かな生産基盤と交通の要衝としての機能によって、原始・古代より能登における拠点の一つとして位置づけられてきた。

羽咋地域は南北を宝達・石動山系、眉状山丘陵に挟まれ、東方にはいわゆる邑知地溝帯の名で著名な低地帯が延びている。また日本海に接する海岸部には典型的な海跡湖である邑知潟を生みだした海岸砂丘が発達している。このような変化に富む地形的特徴によって、当地は能登有数の遺跡密集地域でありながら地域内においても遺跡分布に著しい偏在性がみられる。

眉状山丘陵の西端に広がる海岸段丘帯には多くの遺跡が立地する。この海岸段丘は標高により上位（海拔75～60m）、中位（50～40m）、下位（30～20m）の各段丘に区分されているが、とりわけ柳田町から寺家、一の宮町を経て滝岬に至る延長約3kmの下位段丘面には、当地が古代羽咋地域の中核部であったことを示すさまざまな遺跡が濃密に分布している。一方、寺家遺跡砂田地区、同祭肥地区の緊急発掘調査は当地の海岸砂丘が上記丘陵地帯に匹敵する広大な遺跡群を内包することを明らかにした。柳田タンワリ1号窯跡はこれら遺跡群の背後、標高40～50mを測る中位段丘内に形成された開析谷に立地する。

縄文時代の遺跡は地溝山西側山麓および海岸段丘上に大部分が立地し一部砂丘地でも確認されている。本窯の西南方約700mの柳田シャコデ遺跡では落し穴とみられる遺構が多数発見された。また寺家遺跡砂田地区では後期を主体とし一部前期爪形土器が出土しており、このころには南方から砂州状に延びた海岸砂丘によって入り江が閉塞、湖沼化し邑知潟の原形が誕生していたと推定される。

弥生時代、当地は初期農耕社会を受容するに十分な環境を有していた。邑知潟に接して立地する吉崎・次場遺跡は北陸屈指の集落跡として著名であるが、近年の調査によって広域的交流を示す資料が増加し、単に当地の母村の存在にとどまらず能登における在地勢力の拠点として再認識されつつある。また周辺には多くの集落跡が点在しており、その一つである柳田うわの遺跡では弥生末～古墳時代移行期の一括土器が出土し、編年上見逃すことのできないものである。

当地の古墳は前出海岸段丘部にそのほとんどが分布し、柳田、滝、柴垣地区に比較的整然とまとまっている。柳田古墳群は前方後円墳2基、円墳9基、横穴2基が確認されている。これらは5世紀後半代とも推定される宮の山古墳の他、6世紀代の後期古墳と推定される。中でも山伏山1号墳は県内最古の横穴式石室墳の一つとして注目される。弥生時代末にピークに達した各集落跡は古墳時代に入るとほとんどが廃絶している。このため該期の集落跡については不明な部分が多い。この中で寺家遺跡砂田地区、柳田シャコデ遺跡では7世紀前後の堅穴が検出され、後者では7世紀後半代の掘立柱建物も発見された。

羽咋地域での須恵器生産の実態は、分布調査がゆきとどいていないこともあって未だ十分には把握されていない。柳田地区の背後、海岸段丘部に立地する柳田窯跡群は唯一まとまりをもつ



第2図 柳田タンワリ
1号窯旧河道
出土石罫

のとして知られている。本窯跡群は能登の二大生産地である高松・押水窯跡群、烏屋窯跡群のほぼ中間にあたり、両群とは20 km 弱の距離をおく。本窯跡群の確認基数は周知の5基(柳田五郎兵衛山1~3号、同ヒガシデ1号、同テンジク1号)に詳細分布調査事業、本発掘調査の際新たに発見された5基(柳田タンワリ1号、同テンジク2号、同浅畑1号、同ウワノ1号、同シャコデ1号)を加え計10基と倍増した。しかし分布調査はようやくその一步を踏み出した段階であって実数はこれを大幅に上回るとは明白である。

柳田五郎兵衛山1号窯跡は群中唯一発掘調査が行われている。灰原の小規模な試掘調査ではあったが、7世紀中葉から後半にかけての年代観が与えられ、円面硯、陶馬も出土し調査例の極めて乏しい該期の様相を示すものとして貴重なものである。またテンジク1号窯では7世紀初頭と推定される杯片が採集されている。

奈良時代、柳田台地にはシャコデ廃寺が建立される。一方砂丘内側には堅穴から掘立建物へと変化しつつも建物群が立ち並び、祭祀行為が行われている。寺家遺跡(祭祀地区、砂田地区)は気多神社と深く関係した極めて特殊、大規模な遺跡群である。気多神社は律令体制と深く結びついた大勢力として、当地に深い影響を与えている。現段階でこれらを端的に評価することは極めて無謀であり、一連の発掘調査報告書に期待したい。寺家地区を中心とする段丘部一帯は14世紀に至り気多社僧坊群が立ち並び、その一つである不動院(推定地)が緊急調査により発見されている。

本書図版1は昭和45年の撮影であり旧状をよく残している。現在一帯は有料道路建設、園場整備事業等土木工事が集中した結果その姿を大幅に変えている。この間文化財保護は極めて厳しい状況に直面し多くは記録保存によらざるを得なかった。大規模事業が一応休息した現在、これらの遺跡群をどのように保護活用してゆくのか残された問題は大きい。

III 調査方法と経過

柳田タンワリ1号窯の調査決定から実施に至る間、数回にわたって、現地で掘削断面及び地形観察を行なった結果、窯体は無傷で上流側に遺存する可能性が高いと考えられた。その場合窯体が土砂堆積面より高所に存在するのであれば、調査は灰原に限定し、窯体は現状保存を図ることとし、一部が土砂堆積範囲に含まれる場合には全掘する方針であった。地形測量の結果、上記堆積面の上端である標高29 mライン付近に前庭部が設けられていることが確実となった。したがって窯体に関しては横断トレンチによる位置確認にとどめた。ただし前庭部に関しては埋め戻しを考慮して、通常の調査よりかなり厚めのベルトを残し発掘調査を開始した。調査区は3 m×3 mグリッドを基本に、窯体主軸方向を1~12、直交方向をC~Jで表示、各グリッドは北隅杭で代表した。当初、堰境下流側は、畑地として利用されている点や、工用重機による損傷から原形を保っていることは期待できなかったが、表土除去の結果、予想に反して広範囲に灰原が検出された。ただ灰原上面の土質が、通常の灰層が認められず粘質土であったことは、のちに旧河道上の堆積に起因することが判明するまで、人為的攪乱によるものか確認できないまま調査を進めることと

なり、出土遺物の層位的取り扱いにかなりの時間を費した。2-G・Hトレンチにより窯体を確認した結果、前庭部セクションベルトを若干ずれて設定していることがわかり、約1m移動修正した。6月15日に灰原上面の検出、写真撮影を終え、遺物の検出を開始した。検出にあたっては、調査を灰原に限定したため、結果は別として、層位的取り扱いに特に留意した。出土遺物は、灰原面積の割に少なく、細片がめだった。堰堤下流側各グリッドは緩傾斜であって、作業条件も良く、旧河道との関係が明らかになってからは調査は順調であった。反面上流側は急斜面と崖面での発掘となり、完掘までかなりの時間を要した。

分布調査は、1号窯跡上流部を中心に発掘調査と併行して実施した。その結果、土砂堆積範囲内では窯跡の発見には至らなかったが、影響範囲外とされる斜面上部等3箇所新たに窯跡を確認、柳田テンジク2号窯跡、同浅畑1号窯跡、柳田ウワノ1号窯跡とした。

調 査 日 誌

5月19日	(水)	曇一時雨	羽咋土木事務所担当者との連絡・調整の後、現地地下見。羽咋市教委に調査開始の挨拶。
5月20日	(木)	晴	地形測量開始。基準杭を設定。砂防堰堤工事用仮ベンチマーク(L=29.985m)を原点に水準測量を行なう。(本窯跡調査における標高値はこの値を基準としている)
5月21日	(金)	快晴	煙文センターより調査器材を搬入し、地形測量を続行する。午後現場事務所設置。平坦地がなく、しかも掛土置場確保のため堰堤直下の川をまたいで建てることとした。
5月22日	(土)	晴	地形測量継続。急傾斜と掘削工事後のため相当の危険を伴う。今後の調査の安全確保に十分留意する必要がある。
5月26日	(水)	晴	本日より地元作業員10名が調査に加わる。掘削法面にロープを張るとともに工事による掛土を除去。地形測量も併行して行なう。
5月27日	(木)	晴	ベルトコンベア搬入、残土除去作業続行。
5月28日	(金)	曇のち雨	残土除去完了。雑木・下草の伐採。
5月29日	(土)	曇時々雨	写真撮影用ヤグラの組み立て。調査区写真撮影。
5月30日	(日)	曇のち晴	3m×3mグリッド設定。
6月2日	(水)	晴	グリッド設定完了。表土除去開始。窯体位置確認のため3G・3I杭に平行するトレンチ(6m×1m)設定。地山面の押り込みを検出。窯体主軸方位をはば把握。
6月3日	(木)	晴	表土除去作業続行。グリッド杭補足。
6月4日	(金)	曇	表土除去。羽咋土木担当者来訪、調査期間の打ち合わせ。
6月5日	(土)	快晴	表土・流土除去。3-G-Hトレンチ地山押り込み掘削、窯体位置確認。
6月6日	(日)	晴	流土除去。前日の窯体位置確認の結果、主軸方向セクションベルト(Hライン)を約1m西へずらして設定、前庭部付近3-G・H・Iグリッドも表土除去開始。
6月8日	(月)	晴	流土除去
6月9日	(火)	曇のち晴	堰堤上流側4-D・Fグリッド付近での地山面の検出難行。過去地滑りを起こしている可能性があり。
6月10日	(水)		4-D・E、5-D・Eグリッドを中心に流土除去。50~70cmと予想外に流土が多い。
6月11日	(木)	晴	調査区表土・流土除去完了。写真撮影のため発掘機材の移動・整理。
6月15日	(月)	曇時々雨	前日までの雨のため調査区再清掃。写真撮影(灰原上面検出段階)午後より堰堤下流側灰原遺物検出開始。
6月16日	(火)	晴	灰原遺物検出
6月17日	(水)	晴のち曇	8-Gグリッド等下流側遺物検出続行。本日より上流側(5-F _c)も遺物検出を開始。

6月18日	(木)	雨のち晴	午前中各グリッド排水作業の後8・9・10-Gグリッド遺物検出。機乱部分が目立ち出土遺物は少ない。
6月19日	(金)	晴	午前中10-G・Hc、5-E・Fc等灰原調査。午後、工事法面実測。本窯東隣りの谷にて窯跡確認(柳田ウワノ1号窯)
6月20日	(土)	曇	午前中遺物出土状況写真撮影。本窯上流分布調査(トレンチ調査)。午後各グリッド遺物検出。
6月24日	(水)	晴のち曇	各グリッドともほぼ灰原遺物の検出を終了し基盤の検出に至る。ただ4-Ecでは地山と想定していた礫層より遺物が多量に出土する。灰原土層図実測開始(8・9-Hライン)
6月25日	(木)	曇のち雨	午後雨天調査中止。
6月26日	(金)	雨のち晴	土層観察及び7-1ライン断面図作成
6月28日	(日)	雨	石川考古学研究会等現地見学。約30人が来跡する。
6月30日	(火)	晴	断面図点検、土層写真撮影。午後ベルト除去、前庭部遺構検出。
7月1日	(水)	晴	下流側ベルト除去。
7月4日	(土)	晴	写真撮影(灰原基盤検出段階)のち遺物取り上げ。
7月6日	(日)	晴	テンジク2号窯跡等分布調査。1号窯窯体付近の埋め戻し開始。
7月7日	(月)	晴	機材撤収および発掘土除去。
7月8日	(火)	晴	灰原基盤平板測量および上流側土層実測。プレハブ撤去。午後航空写真(スポット)撮影。
7月9日	(水)	晴	平板測量完了。窯体を埋め戻し、崩壊防止のため杭で補強。本日で現地調査を終了する。

IV 柳田タンワリ1号窯跡

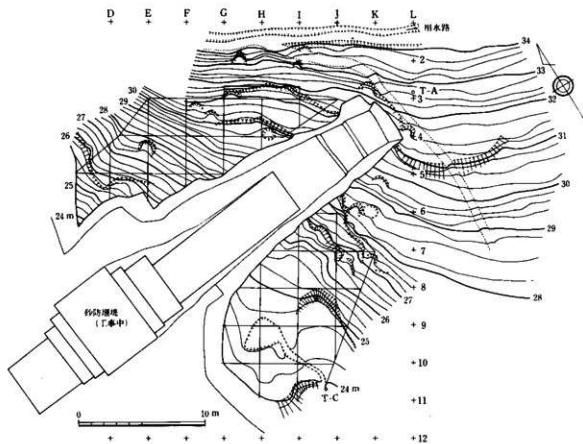
1 立地

西出川の浸食により、中位海岸段丘内に形成されたV字状開析谷東斜面に立地する。本斜面頂部は中位段丘面であったが、開析作用により、南に緩く傾斜した幅20m程度の平坦面を残すに過ぎず、テンジク2号窯の位置する西斜面頂部とは対照的である。また斜面の傾斜は上部は緩やかであるが、中腹以下は極めて急傾斜である。

西出川流域では浸食が著しく、本窯付近では操業時から現在までの約1300年間に川床が約4m下がったことが調査の過程で明らかになった。このことは西出川流域の窯跡の立地をみる上で留意すべき点である。

本窯の焚き口付近の標高は約30mである。斜面頂部および川床での標高がそれぞれ約40m、25m、比高約15mであることから、操業時点では焚き口は斜面の下1/3付近に当たり、傾斜変換点よりやや上方で、斜面にはほぼ直交して築窯されたと考えられる。

現在、西出川は上流各所に灌溉用のため池が設けられており、流量は減少・一定しているが、当時は降雨ごとに相当の水量が蛇行しつつ流れていたことは想像に難くない。したがって本窯を含め、運搬路として谷道を想定することはやや問題があり、比較的平坦な尾根筋から中腹の利用が妥当といえる。



第4図 柳田タンクリ1号窯跡現況測量図 (S=1/300)

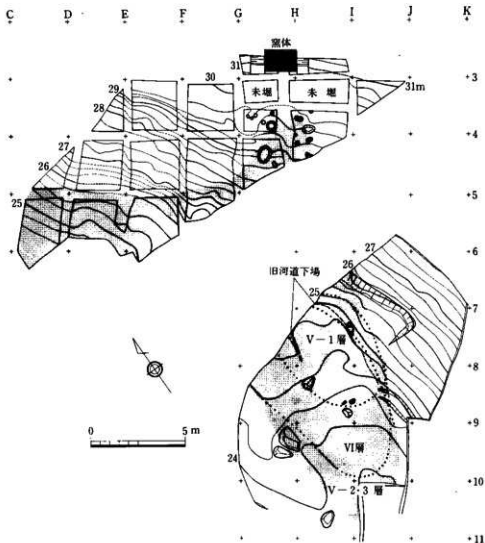
2 遺構

窯体

位置確認の結果、保存可能なことが判明した。したがって窯体の調査は最小限にとどめ、埋戻し後の崩落防止のため、土層観察用ベルトを厚く残したまま前庭部の一部を発掘したにすぎず、窯体構造は殆んど把握されていない。

窯体主軸方位はN-28°-E前後と推定され、等高線に直交する。焼成部、煙り出し等は明らかではない。

2-F・Gトレンチによって得た横断面(第6図)は燃焼部付近と考えられる。床面での標高は29.8mで、地山面から約1.7m掘り込んでいる。床幅1.6m、側壁は僅かに内傾するものの直線的に立ち上がり、左壁で0.6m、右壁で0.7mが遺存する。天井は消失しており明らかにし得ないが、掘り方横断面の形状は、地山より約0.8mを逆梯形に掘り込んだ後、ほぼ垂直な側壁を持つ窯体を掘削したことを窺せており、この屈曲部が側壁と天井との境をなすと考えたい。焚き口から燃焼室にかけての天井は比較的偏平な断面を持つ場合が多いことも考慮するならば、本横断面



第5図 柳田タンワリ1号窯跡原地形測量図 (S=1/200)

での天井高は1m程度としても大過はないであろう。

調査の過程で窯体規模をとらえるべく、1-日杭横の灌溉用水路内で深さ約1.0mまで断割りを行なったが、水路直下より明らかに地山土が現れており、掘り方は存在しない。さらに焼成部の傾斜を考慮しても、地山面よりかなり低く位置すると考えられる。したがって2-F・Gトレンチ付近より奥は掘り抜き式構造をとると推定される。

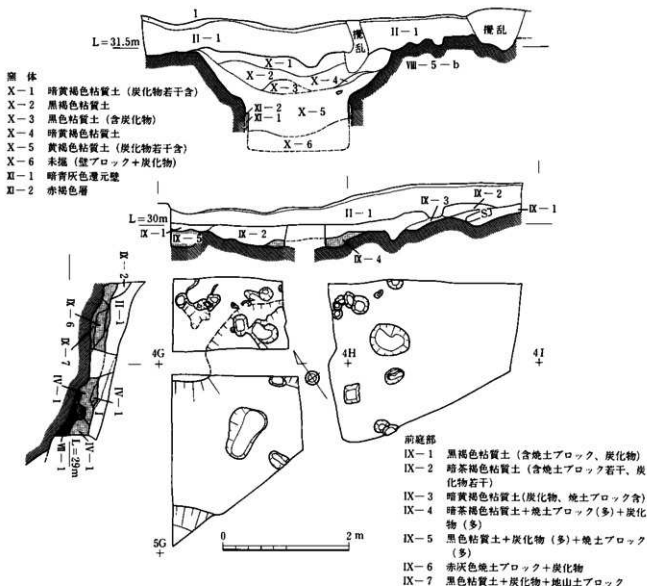
前庭部

傾斜変換点に前庭部を設けたため、窯体主軸に関して左右の成形は異なる。

すなわち、29.75mコンター付近を境に低位斜面は南西方向に大きく振れ急傾斜を呈する。この傾向は3-E・Fグリッド等上流側で顕著である。そのため焚き口前面左および先端に明黄褐色粘質地山土を盛る一方、焚き口寄りには地山を掘り込み、幅約1.5m、長さ1.7m前後のなだらかに凹む平坦面を作り出している。右側は若干削ってはいるものの旧地形をそのまま利用しており、明瞭な盛土は認められない。

左堤上面は比較的平坦であり、4G枕付近で方向を変え3-E・Gグリッド上端の平坦面に続く。北西に延びるこの面は地山を削平し設けられており、作業通路としての性格を持つと考えられる。

前庭部中央には不定形の浅い凹みが検出されている。前庭部の遺物の出土量は少なく炭化物、灰、焼土ブロックの堆積が目立つ。本窯前庭部の特徴として、灰原に向かってほぼ規則的に穿たれた小型のピット群が挙げられる。径30cm前後のこれらのピットは底面の水平なものが多く、しっかりと地山に掘り込まれており、柱穴と推定される。すなわち、焚き口直下より前庭部先端まで窯体主軸方向に幅1間の簡単な上屋が設けられていた可能性がある。

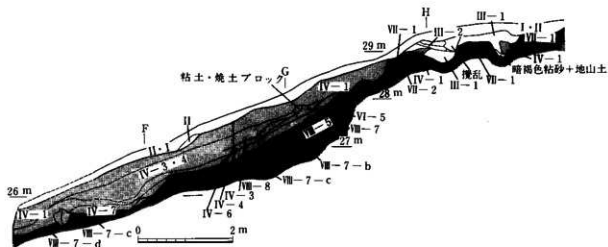


第6図 柳田タンワリ1号窯跡前庭部・窯体断面実測図 (S=1/60)

前庭部に関しては、明瞭な床面の重なりは検出できなかったが、一部補修を思わせる部分も認められた。

灰原

工事により過半が消失している。中心部が切断されているため、前庭部より灰原裾まで地横状況を一貫して捉えることは不可能であった。第8図に土層断面を示したが、切断部の上流側断面と下流側断面で対応する層は認められなかった。

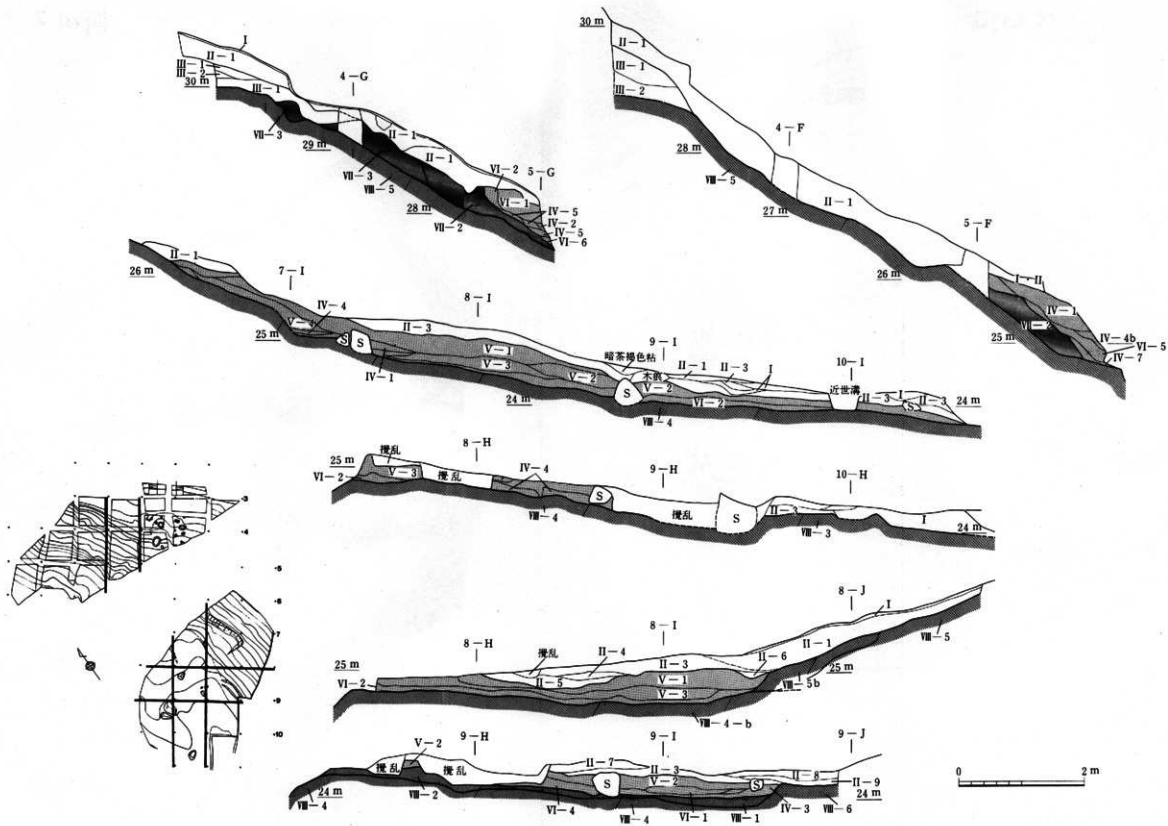


第7図 柳田タンワリ1号窯跡工手法面灰原断面見越し測図 (S = 1/80)

第2表 柳田タンワリ1号窯跡(灰原)土層一覧表

区分	層No.	土 質	区分	層No.	土 質		
表土	I	腐食土	灰 原	V-3	黒色粘質土+炭化物	環境 下 部 層	
流	II-1	黄褐色粘砂土(途路底土)		V-4	緑灰色粘質土		山 河 道 下 部 層
	II-2	黄褐色砂土		VI-1	淡緑灰色粗砂		
	II-3	暗黄灰色粘質土		VI-2	暗緑灰色粗砂+礫		
	II-4	黒褐色強粘質土		VI-3	黒灰色粗砂		
	II-5	灰褐色強粘質土		VI-4	暗褐色粗砂+礫		
	II-6	灰色粘質土		VII-1	暗褐色粘質土		
	II-7	暗褐色粘質土(工事底土)		VII-2	黄褐色粘砂土		
	II-8	灰褐色粘質土		VII-3	黄褐色粘質土		
	II-9	灰色強粘質土					
土	III-1	暗褐色粘砂土(含土器)	土	VIII-1	淡緑灰色粗砂(旧河道)		
	III-2	褐色粘砂土(含土器)		VIII-2	暗緑灰色砂礫		
灰	VII-1	黒色灰		基 礎 層	VIII-3	明褐色礫層	
	IV-2	赤褐色焼土塊+黄褐色粘土塊			VIII-4	緑灰色岩盤	
	IV-3	黒色灰+焼土塊			VIII-4b	淡緑灰色岩盤	
	IV-4	地山質黄褐色土+焼土塊+炭化物			VIII-5	黄褐色粘砂土(硬質)	
	IV-4b	IV-4と同組成であるが硬質			VIII-6	緑灰色粘質土	
	IV-5	地山質黄褐色土+炭化物(多)+焼土塊			VIII-7	黄灰色粘質土	
	IV-6	地山質黄褐色土+炭化物(多)+焼土塊	VIII-7b		淡灰色強粘質土		
	IV-7	炭化物+焼土塊+灰色粘	VIII-7c		暗灰色強粘質土		
	IV-8	淡灰色粘質土+炭化物(少)	VIII-7d		灰色強粘質土		
原	V-1	黒褐色強粘質土	山	VIII-8	黄褐色暗岩質岩盤		
	V-2	黒褐色粘質土					

注 IV-VI層各土質は比率の多い成分より配列している。



第8図 柳田タンワリ1号窯跡灰原土層断面図 (S=1/60)

本窯の灰原を概括すれば、その広がりには4—H杭付近の前庭部を要めとしてはほぼ90°の開きを持ち扇形に堆積し、裾は、前庭部との比高—4.5—5m、斜距離約8m(Hライン窯体軸方向)の谷底を流れる西出川の流路に達している。第5図に明らかなように、本窯構築時同川は、下流側では9—H、10—I杭を中心としてはほぼ南に流路をとる。上流側では直接確認し得ないが、等高線の流れより、6—D杭付近をほぼS—30°—E方向に流れていたとみるのが妥当であろう。なお、Dライン最低レベルは24.5mと下流側川床最高値24.75mより低いが、後世の浸食の結果と考えられ矛盾はない。すなわち、同川は前庭部直下で「く」の字状に蛇行しており、その流れに落ち込んだ灰原先端がさらに下流側に押し流され随時二次堆積した結果、下流側に大きく伸びる「逆心形」灰原が形成されたといえる。

残存部の基本的層序は窯廃棄後の堆積土をI・II層、灰原をIV—VI層、前庭部盛土VII層、地山をVIII層に大別した。

便宜上、斜面堆積層のみから成る上流側と、西出川による二次堆積層を含む下流側とに分けることにする。第7図は法面見透し図ではあるが、前庭部先端も含め前者の堆積状況を唯一示し得るものである。灰原は厚い所で約80cmを割り、上面は焼土塊・粘土を殆んど含まない黒色灰層(IV—1)が厚く覆っている。中間層には赤黒色を呈する黒色灰・焼土塊・炭化物から成るIV—3層が目立つ。本層は全体として均一ではなく、さらに厚さ2—3cmの薄層に峻別し得る。この細層が一回の窯出しに対応するかは定かではない。下層から基盤まではIV—4—8層とした黄褐色粘質土を多く含む各層から成る。これら各層ではIV—1にみられる黒色灰よりも燃料残骸の比較的大きな炭化物の破片が多く含まれている。

下流側各グリッドでは焼土塊の混入は認められない。灰原は基本的には灰を多量に含んだ粘質土(V層)と、灰の混合により薄黒く汚れた川砂層(VI層)から成り、両層の境は明瞭である。9ライン断面基盤(VIII—1)は築窯直前における川底砂利層であり、遺物の有無・土色を除けば、IV—3層とは全く同一の土質である。

3 遺物

出土遺物は遺物箱19箱分であり、灰原規模のわりに少量であった。その大部分は灰原からの出土であり、他に3—E・F_c平坦面、前庭部より検出したものも一部分含むが量的には僅少である。

以下各器種ごとに分類・概説する。分類にあたっては形態によりA、B、C…類に大別し、法量、調整・細部形態によりI、II、III、… a、b、C…と細分を行なった。

杯類に関しては蓋・身のセット関係が大部分不明であったため、両者を分離し形態差の把握が比較的容易であった蓋を基準に行なった。また有台杯の口径が12cm以上(12cm代は少量で殆んどが14cm以上)である点を考慮し、口径12cmを分類上の指標とした。

杯 蓋

A類(第9図1—13)

口径10cm前後。やや扁平な宝珠形つまみをもち、最も大きなかえりを有する一群である。胎

土は比較的良好であるが焼成不良品が少なくない。細部形態調整によりa～eに細分し得る。

- a (1～3) 天井部は丸みをおび器高は高い。天井部外面は回転ヘラ削りを行なっているが平滑に仕上げられており、痕跡は不明瞭。内面中央の不定方向の仕上げナデは認められない。
- b (4) 最終調整はaと同じであるが天井部回転ヘラ削りは強く、口縁端まで器厚は一定する。
- c (5～9) 受け部に稜をもち、かえりが屈曲している点特徴。口縁部は薄く天井部平坦面との器厚差は大きい。最終調整はaと同一である。
- d (10・11) 天井部内面中央に螺旋状の強い横ナデ痕を残している。かえりの形態は、11に關してはbと同一である。
- e (12・13) 天井部は扁平で器厚はA類中最も薄い。かえりは大きく、口縁端より下方に突出したものもみられる。つまみはa～dよりやや扁平である。天井部内面中央には軽い仕上げナデが認められる。

B類 (第9図14～42, 第10図45～50)

口径9～10cm。11cmを越えるものは極めて少ない。口径の割に大形で個性的なつまみをもつ。

- a (14～42) 精緻な胎土、焼成も良好で杯身C類と重ね焼きを行なっている。口径分布は9.0cmから10.6cmまで連続的であり、明瞭な口径差は認め難い。本類の特徴に天井部内面の強い凹凸があげられる。凹部での器厚が2mm前後と極端に薄いものも少なくない。外面は口縁部付近まで極めて丁寧な回転ヘラ削りを行なっている。つまみは貼り付け後横ナデにより調整しており、その際天井部1/3程度はあわせて横ナデを行なって仕上げている。内面中央部には仕上げナデが認められる。
- b (45～48) 基本形態および調整はaと同様である。天井部と口縁部の境はゆるやかに屈曲し平坦面を持つものもある。また受け部幅はaよりもやや広い。本類は胎土に砂粒を含み、調整もaに較べ入念さを欠き全体的に肉厚で、シャープさがみられない。
- c (49・50) 胎土に石粒が目立ちbよりさらに粗悪である。そのため天井部外面の回転ヘラ削り部分も器面が荒れている。天井部内面にはa～cにみられる凹凸はなく、横ナデにより器厚は一定であり仕上げナデはかすかに認められる程度である。

C類 (第10図51～56)

口径約10cm。天井部は一段高く平坦面をもち、口縁部にかけて段をなし肩が張る。天井部外面は口縁部近くまで回転ヘラ削りを行い、内面は横ナデ調整および仕上げナデを行なっている。

- a (51～53) 全体的に厚手がかがしりした印象を与える。天井部内面には弱いながらB-a類に顕著な凹凸がみられる。
- b (54～56) a類に較べて薄手で肩の張りも弱い。かえりはより小さく、天井部側基部に稜をつけず中央からかえり先端まで連続的に横ナデ調整を行なっている。天井部内面には弱い仕上げナデを行なっている。

D類 (第10図57～62)

口径10cm前後、口径差は少ない。全体に扁平で、器肉はやや厚めのものから薄手まで個体差がある。天井部から口縁部付近まで広範囲に回転ヘラ削りを施し、さらに口縁基部には強い横

ナデによって幅1cm前後の凹帯が巡っている。

- a (57~59) 厚手の一群である。57はC類51と同形態のつまみをもちC類にみられる肩部の段を凹帯で表現したような印象を受ける。
- b (60・61) 薄手のものである。
- c (62) 器高が高く、D類の中では異質であるが、口縁部形態および弱いながらも凹帯が存在するため本類に含めた。

E類 (第10図63)

D類よりさらに薄手で器厚2mm前後、天井部凹面での器厚は約1mmと著しく薄い。天井部の大部分は回転ヘラ削りで仕上げていると考えられるが降灰のため明らかではない。

F類 (第10図64~69)

平坦な天井部から稜をもって斜め下方に直線的に伸びる口縁をもつ1群である。口縁端部は細く仕上げている。天井部平坦面外端付近は著しく肉厚であり、かえりは形態化し粗雑な成形である。内外面とも細部形態はばらつきがある。

- a (64) 口径 cm。内面は天井部中央からかえり先端まで一気に横ナデを行ない半球状に仕上げ、内面の凹凸はみられない。
- b (65~67) 口径10~11cm。65・67は細片ゆえ復元径に問題が残る。天井部外面1/2に回転ヘラ削りがみられ、内面はa同様平滑である。
- c (68~69) 内面に凹凸がみられる。68の天井部平坦面は粗雑な回転ヘラ削りを行なっているものの、ヘラ切り痕を残しており、極めて雑な調整である。一方69では口縁端部までヘラ削りがみられる。68の受け部には身口縁端が融着し、おそらく直立に近い口縁をもつ身と組み合わせられているとみられる。

G類 (第10図70・73)

薄手で、かえりは断面半球状を呈し凸帯という表現が適切である。

H類 (第10図71・72)

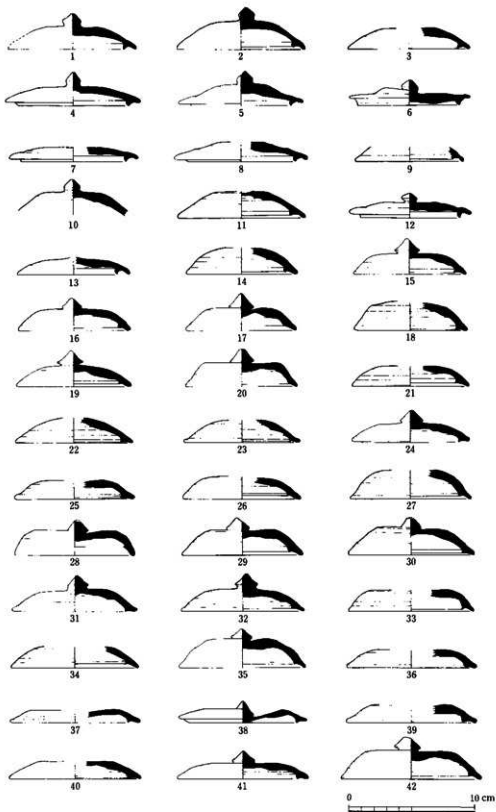
外面は丁寧な回転ヘラ削りが口縁近くまで施され、内面は横ナデにより平滑に仕上げている。天井部は薄く引き伸ばされ器厚は一定しており、前述各類と較べて入念な調整である。

I類 (第10図74・75)

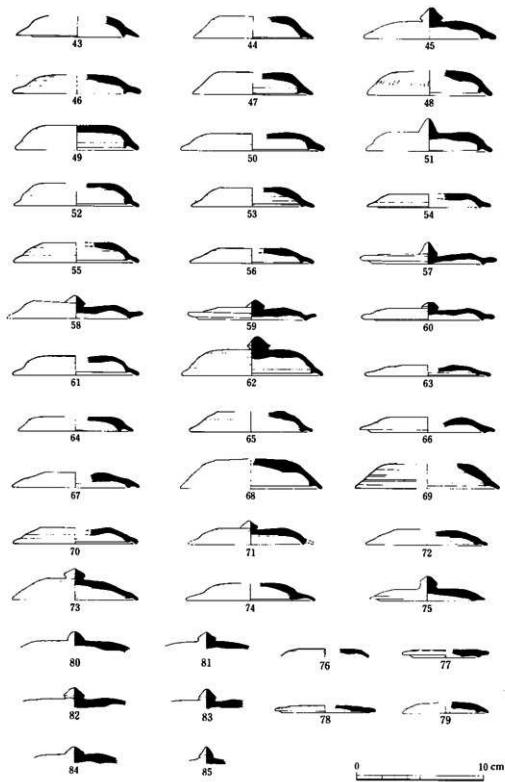
その他特異なものである。74は受け部が著しく広い。75は肉厚の天井部をもち外面には粗雑な回転ヘラ削りが口縁付近まで施され、内面のかえりは僅かにヒダ状となり口縁端は著しく薄い。

J類 (第10図76~79)

口径7~8cmと小形である。外觀はE類に類似する。天井部はほとんど盛り上がりず凹盤状を呈する。外面は口縁端まで回転ヘラ削り痕を残し、内面は器面の凹凸がみられる。かえりの断面は半円形に近い。



第9図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物(1)杯蓋



第10図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物(2)杯蓋

K類 (第11図86・95)

口径12~13cmおよび16cm前後の2種類がみられる。大形品の中ではシャープで先端の鋭いかえりをもつ。

K-I (86) 口径12~13cm。天井部は高く、おそらく丸く盛り上がった形態であろう。天井部中央寄りに回転ヘラ削り痕がみられるが細片のため全体を明らかにし得ない。

K-II (95) 口径16cm。天井部3/5に回転ヘラ削りがみられ、内面には広範囲に不定方向の仕上げナデを行なっている。

L類 (第11図88・94)

かえりは小さく、K類に較べて器肉も厚い。口縁部外面は強い横ナデによって丸みを帯びた稜をもつ。点数が少なく、破片であることから明確ではにいが口径13cm前後のL-I (88)、16cm前後のL-II (94) がみられる。98は口径約21cm、形状ではL類に類似するが口縁付近までヘラ削りが施されており本類の大型品とみることは疑問である。

M類 (第11図91~93)

口径16cm前後、受け部幅が1.5cm前後と広く特徴的な口縁をもつ。92は口縁基部の凹帯を除き全面に粗い回転ヘラ削り痕が残る。内面には広範囲に不定方向の仕上げナデがみられる。

N類 (第11図89・90・96・99~103)

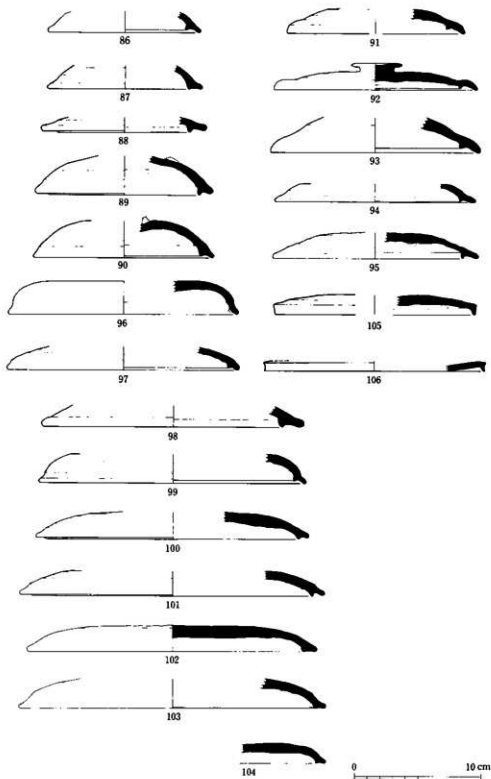
大形品の中で最も多くみられる。受け部幅は1cm以内と狭く、かえりはしっかりとつくられた1群(N-a)と、やや薄手で受け部がわずかに凹む程度の平坦面となり、かえりが彫削化している1群(N-b)がある。N-b類は全て焼成不良品であって、堅脆なa類とは対称的である。N類の口径をみた場合、14cm、18cm、21~24cmの3群(I~III)に分かれる。ただし21~23cmを測るものについては焼き歪みのため正確な値を求め難い。

a (89・90・101) 口径14cm前後のa I (89・90)、24cm前後のa III (101) がある。本類は受け部を深くしっかりと作るために口縁を強くはさんで横ナデを行なっており、そのために口縁上面に凹帯あるいは狭い平坦面が生じている。a Iの外表面は口縁付近までヘラ削りを行ない、内面には広く仕上げナデがみられる。a IIIは自然軸のため不明瞭である。口径18cm前後のa IIは計測可能なものには認められなかった。

b (96・100・102・103) 口径18cm前後のb II (96)、21~24cmのb III (99・100・102・103) がみられる。内面は広く仕上げナデが施され、外面では天井部2/3を回転ヘラ削り、口縁部は横ナデにより仕上げている。102外面には上記調整前に行われた荒いハケ状具による外方向への調整が認められる。天井部中央および口縁部は仕上げ調整により消去しているが、天井部外面全体に行なわれたとみられる。

O類 (第11図105・106)

内面にかえりを持たず、口縁端を折り曲げたものである。天井部は扁平で口縁は鋭く仕上げられている。出土遺物中からは図示した2点のみ検出した。



第11図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物(3)杯蓋

杯身

口径12cm以下の無台杯身は形態差に乏しく判然とした分類には至っていない。

杯身製作過程で用いている「へら削り」は、底部切り離し後生乾き状態で器壁を薄く成形、あるいは器面を平滑に調整するために行う一般的な「回転へら削り」と、底部切り離し前にへら削り過程直前のもので、体部下半あるいは底部との境界付近に施したものとがみられる。後者は器面が柔らかい状態で行なうため砂粒等が沈み、横ナデに近い痕跡を残す。したがってへらのあて方、あるいは器面の状態によっては極端な場合横ナデとの識別が困難となる場合も生じている。本書では前者を「回転へら削りA」、後者を「回転へら削りB」とし区別して記述する。

(無台杯身)

A類 (第12図107~110)

口径8.5~9.5cm。体部外傾度が小さく、口径に比較して器高の高い1群であって、底部から体部にかけては肉厚である。個体数は少ないものの、調整・細部形態により細分可能である。

a (107・108) 底部内面は器面に凹凸がみられ、弱い仕上げナデが施されている。108の体部下部には回転へら削りBがみられるが107では不明瞭である。底部切り離し痕は107では丁寧なナデ、108は粗いナデによって整えている。

b (109・110) 外形はaと類似するが、底部内面は凹凸がなく平滑である。体部外面下1/3には回転へら削りBを施している。底部周辺はナデ調整により切り離し痕を消している。

B類 (第12図111)

口径9.7cm。底部内面はA-a類107と同一であるが、口縁部が外反する点で異なる。底部から体部1/3にかけては回転へら削りBが施され、底部周辺はナデにより仕上げている。

C類 (第12図112~130)

口径9cm弱~10.5cm。全体に肉厚で底部内面に強い凹凸を残している。本類の大部分は裏返しにした蓋B-a類を交互に重ねて焼成しており(図版8)、直接セット関係を把握し得る唯一のものである。本類は重ね焼きにより生じた特徴(底部内面にみられる蓋つまみの融着痕あるいは接触による凹み、底部外面の色調差等)の有無によって容易に抽出し得た。

調整は蓋同様丁寧で胎土・焼成とも良好である。底部内面には軽い仕上げナデが認められ、体部外面下約1/3には回転へら削りBを行なったものが多く、横ナデ状を呈し峻別不能のものも一部みられる。底部外面はへら切り未調整であるが、周囲をナデ調整したもの(116・119・124)も含む。

D類 (第12図133~137)

口径10~10.5cm、器高3cm前後。C類と異なり体部は丸みをもって立ち上がる。底部内面には凹凸が残り、C類に顕著な体部下半外面の回転へら削りBは認められない。底部外面は切り離しの後横ナデによって仕上げられており、134以外はほとんどへら切り底を消している。したがって底部と体部の境には痕は認められない。

a (133・134) 重ね焼き痕がみられ、体部はD類中最も薄手、胎土も比較的良好である。重ね焼き形態が身・倒蓋であるのか身・身であるかは判然としない。

b (135) 重ね焼き痕はみられない。a に較べてやや厚手である。

c (136.137) 重ね焼き痕はみられない。底部内面の凹凸は a・b よりも少なく、口縁端部を外反させている。底部外面の仕上げは D 類中最も丁寧である。胎土は石粒が顕著である。

E 類 (第 12 図 138~141)

口径 10.5~11.5 cm。胎土は精緻。底部内面は凹凸が強く残る。体部は屈曲し細く伸びた口縁に至る。内外面ともに横ナデ調整である。底部外面に見られる螺旋状へら切り痕は密であって、切り離しにロクロ回転を十分利用している。底部外面はナデおよびハケ状具で調整している。

F 類 (第 13 図 142~146)

口径 11.5 cm, 器高 3.5 cm 前後。ほぼ直線的に外傾する体部をもつ 1 群である。体部下半および底部外面調整は個体差があり細分可能である。ただし 142 以外は焼成不良で摩滅が著しい。

a (142~144) 底部内面中央は凹み、薄手の体部は丸みをもって立ち上がり、丸みをおびた口縁に至る。内外面ともに横ナデ調整で、底部切り離し痕はナデにより整えている。

b (145) 底部内面の器面の凹凸は少なく、底部外面は平坦で E 類に類似する。螺旋状へら切り痕は密であって粗いナデによって調整している。

c (146) 体部外面下半に回転へら削り B がみられる。内面は横ナデにより平滑で底部中央の凹みも少ない。底部外面へら切り痕はナデにより完全に消されている。

G 類 (第 13 図 147~152)

底部内面は平滑で凹凸はみられない。器厚は薄く均一化し、体部は外反する。また底部外面はへら切り痕を残しながらも平坦に仕上げている。胎土、焼成とも良好で、特徴的な 1 群である。本類は口径により、I (9~10 cm, 147・148), II (12.5 cm 前後, 149~151) III (14 cm 前後, 152) に細分可能である。152 体部下 1/4 に回転へら削り B がみられる以外は内外面とも横ナデ調整であって底部内面には広範囲に仕上げナデが認められる。また底部外面はナデ調整で仕上げている。147 以外にはすべて身一身の重ね焼き痕が残る。

H 類 (第 13 図 153)

口径 10 cm, 底径約 5 cm, 小形で厚手の底部をもつ。底部へら切りは雑であり、粗いナデを施している。

I 類 (第 13 図 154~157)

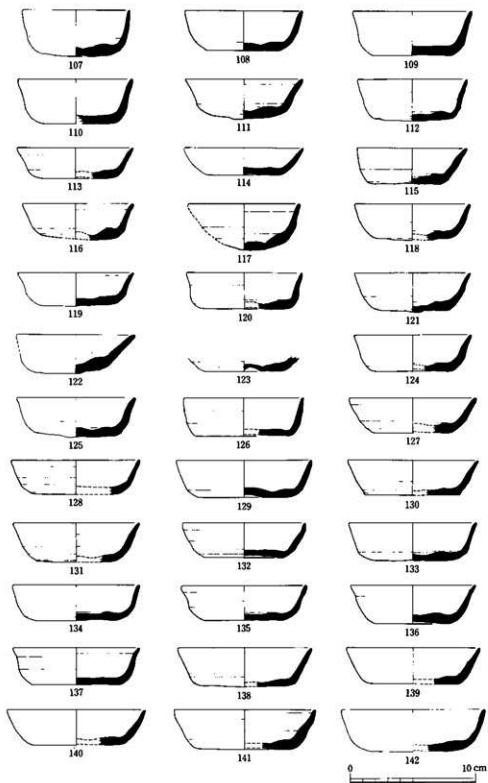
口径 11~12 cm, 器高約 4 cm。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部で外に開く。口縁部外側が肥厚するもの (154) もみられる。体部内外面および底部内面は横ナデ調整で仕上げ、器面の凹凸は僅かである。また底部内面の仕上げナデは認められない。底部外面には径 6 cm 前後の切り離し痕が残るがナデにより平滑化している。

J 類 (第 13 図 158)

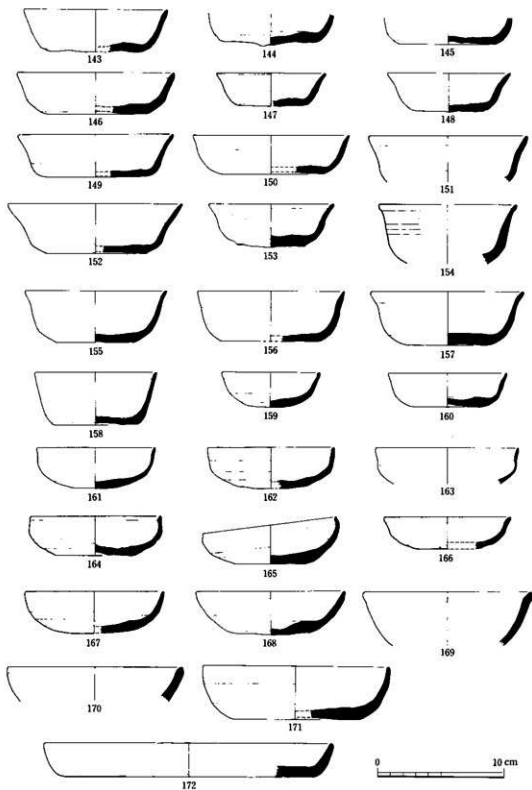
口径 9.6 cm, 器高 4.2 cm, 1 点のみである。体部は薄くするどく立ち上がっている。内面はすべて横ナデ調整であり、底部外面は丁寧なナデにより平滑である。

K 類 (第 13 図 159~168)

調整および細部形態から以下の如く細分できる。



第12図 柳田タンワリ1号竪跡灰原出土遺物(4)杯身



第13図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物(5)杯身、皿

- a (159) 口径7.8 cm, 内外面とも横ナデ調整, 口縁内面は丸く肥厚する。
- b (160) 口径9.3 cm, 体部内湾は弱い。底部内面には凹凸がみられる。底部外面にはかすかにヘラ切り痕を残す。
- c (161~164, 166) 口径10~11 cm, 体部中央で内屈し上半はほぼ垂直に立つ。器厚は概して薄手である。底部内面には器面の凹凸が残る。同外面はH類と類似した調整である。
- d (165) 口径約11 cm。形状はc類と類似するが底部から体部外面下半にかけて、回転ヘラ削りAを行なっている点が大きな特徴である。
- e (167・168) 全体的に厚手である。体部外面下半には弱い回転ヘラ削り痕が認められるが、どの段階で行なわれたものか判然としない。
- f (169・170) 口径13~14 cm。肉厚の体部である。細片のため全体を明らかにし得ない。
- g (171) 口径15 cm。底部は凹凸がみられず平滑である。fとともに出土量は少ない。

L類 (第13図172)

いわゆる皿であって、口径約23 cmを計る。底部外面は横ナデ調整, 体部との境には幅1 cm弱の回転ヘラ削りAが認められる。

(有台杯身)

M類 (第14図173~177)

口径14 cm前後。器高4 cmと推定される。体部はほど直線的であり、底部体部ともに器肉は均一である。体部内外面は横ナデ調整、底部内面は仕上げナデを行なっている。底部外面は高台を貼り付け横ナデを行なった後、中央部付近に回転ヘラ削りを施し、底部切り離しによって生じた器面の凹凸(中心部の粘土の盛り上がり)を平滑化しているとみられる。本類の高台は高台高0.8~1.0 cmと本窯出土資料中最も大形でしっかりとしている。

N類 (第14図178~182)

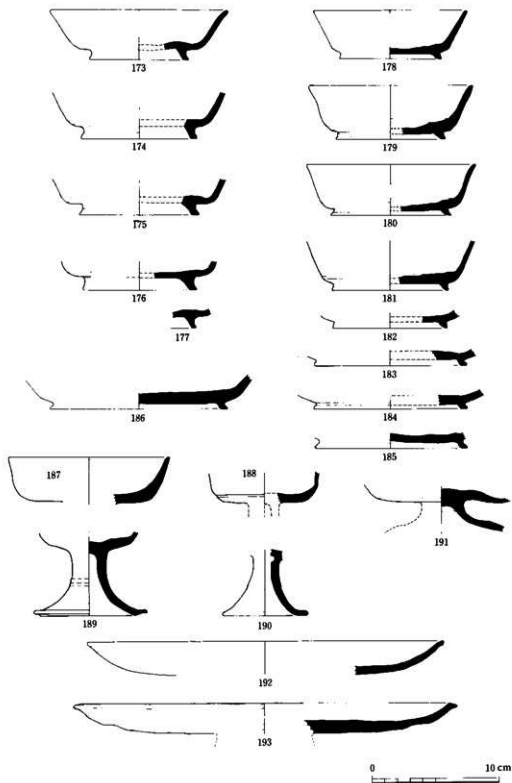
口径12~13 cm, 器高4 cm強。体部外傾度はM類よりやや小さい。器体各部に器厚差がみられ、高台付近から体部との境界にかけては肉厚である。内面は横ナデおよび軽い仕上げナデが認められる。高台は高さ約0.5 cmを測り、外方に張り出し外端で接地している。底部外面は高台を貼り付け後、横ナデを行ない180以外はさらにM類と同様回転ヘラ削りにより調整している。

O類 (第14図183~186)

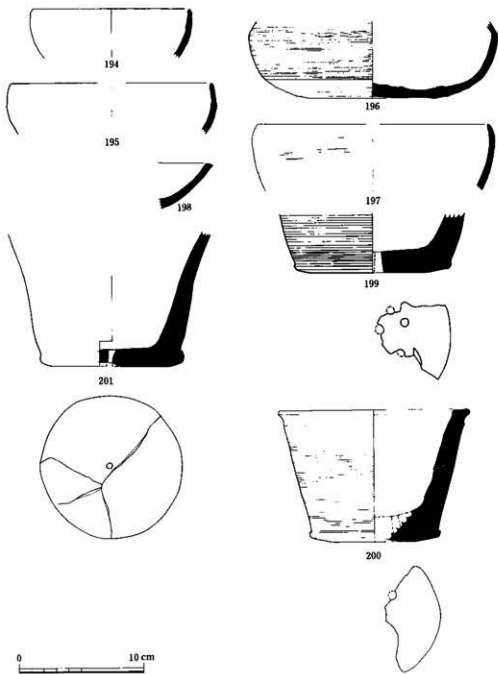
すべて底部片である。高台は外面基部が細くぐびれ外端が突出しており、高台高0.6 cm前後である。高台径は約12 cm (183~185) のものと約14 cm (186) の2種類がみられる。底部外面の調整はM・N類と同様である。

高杯 (第14図187~191)

高杯とわかる破片は少ない。脚部はゆるやかに開くもの(189・190)と著しく外反するもの(191)がある。190は脚端部に面を持つが、189では丸くおさめ内面に施された稜で接地している。ともに中程に1条の凹線を施しているが、浅く不明瞭であり189では一巡した凹線がずれるなど施文は



第14図 柳田タシワリ1号窯跡灰原出土遺物(6)杯身、高杯、盤



第 15 図 柳田タンワリ 1 号窯跡灰原出土遺物 7 鉢

罐である。杯部は内外面とも横ナデ調整で仕上げている。188は焼き歪みにより体部は直立きみであるが本来は187と同形態である。

法量を比較した場合、口径13cm(187)、10cm(188・189)、および10cm以下の小型のもの(190)がみられる。191の体部は口径13cm前後と推定される。

盤(第14図192・193)

193は口径29cm。底部と体部の境に段をもち、ゆるく立ち上がる。口縁は平坦面をもち中央が若干凹む。底部内面全体に仕上げナデが施され、同外面は回転ヘラ削り痕を残す。また底部には胸貼り付け痕をとどめており、剥離面から復元すれば脚部径は8cm前後となるが、破片のため信頼性は低い。192は遺存部はすべて横ナデ調整であり、内面には一部仕上げナデが認められる。

鉢(第15図194～201)

A類(194～197)

薄手の体部が内湾しつつ立ち上がり、口縁はやや内傾する。口縁端は丸みをもつが194では口縁直下外面に稜をもつ。体部は内外面ともに横ナデで仕上げたものと、外面にカキ目調整を行なったもの(196・197)がみられる。196の底部より体部下半にかけては回転ヘラ削りがられる。底部形態は196を除き不明である。ただ鉄鉢形を呈するとは考え難い。

B類(198)

器体は浅く口縁端に面をもつ。残存部はすべて横ナデ調整である。細片のため口径等は不明。

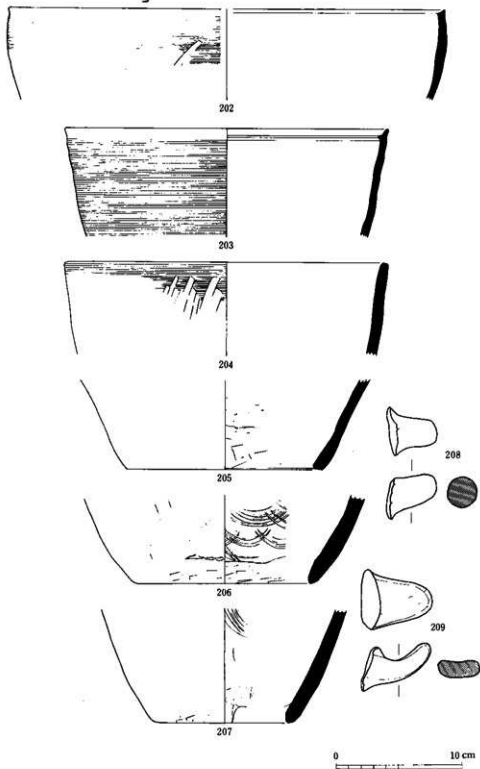
C類(199～201)

すり鉢を一括した。口径15～16cm程度、器高12cm前後である。厚さ1.5～2cmの厚い円盤状底の底部に、厚い体部粘土紐を貼り付け成形している。200の口縁は端部と口縁直下を押さえて平坦面を設けている。体部外面はカキ目調整、底部外面はヘラ削りで仕上げている。201は生焼けて摩滅しており体部外面調整は不明である。

底部には径0.5cm程度の貫通孔がみられる。201は中央部1箇所のみであるが、199・200は複数である。おそらく199では7～8、200では3～4箇所に穿孔されているとみられる。

甌(第16図202～209)

口径25cm前後、底径10～15cm程度が主流をなし、大型品(202、推定径35cm)も存在するようである。口縁は水平面を有するもの、端面の中央が若干凹み内傾するもの、内側に凸帯を運らすもの等さまざまである。胴部上半では内面横ナデ調整、外面はカキ目調整が行なわれており、204はさらに胴部中央を縦方向にヘラ削りを行なっている。胴部下半は基本的には叩き整形の後横ナデ調整を行ない、さらに底部および胴下部内面を粗いヘラ削りによって仕上げている。205内面は遺存部全面をヘラ削りし薄手に仕上げている。206底部内面には先端の欠損した突起がみられる。把手209の接合面には胴部外面の平行叩き目が転写され痕跡をとどめている。



第16図 柳田タンワリ1号窯跡灰塚出土遺物(8)版

長頸瓶 (第 17 図 210~217)

A 類 (210・211)

肩部を加飾した台付長頸瓶。210 は 3 条の凹線間に綾杉状へら描き文を有する。体部は丸く肉厚である。加飾部以下の外面は回転へら削りのままであって底部には有台杯 (M 類) と類似した貧弱な貼り付け高台をもつ。体部上半および内面は横ナデ調整である。211 は凹線間を櫛描き文で加飾し、内外面ともに横ナデ調整である。

B 類 (217)

台付長頸瓶。胴部最大径は 22 cm と大型である。底部から体部立ち上がりにかけては回転へら削り、肩部以下の体部はカキ目調整で仕上げている。内面は横ナデ調整による。

C 類 (212・216)

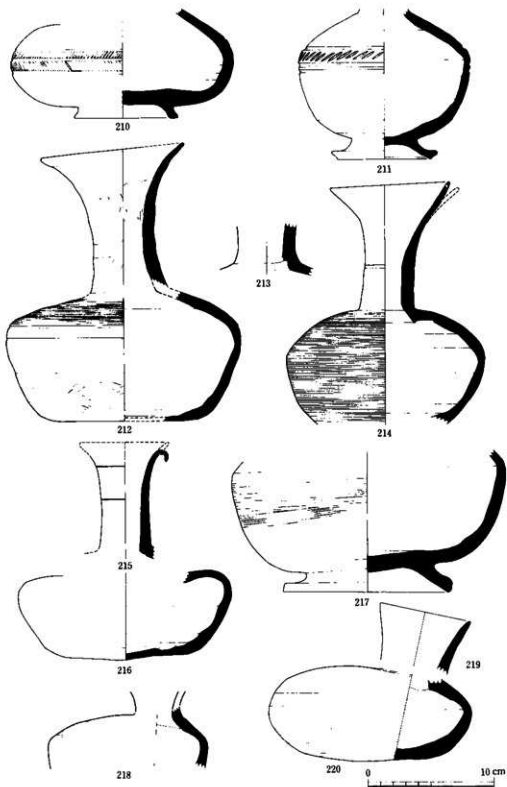
無台のもの。体部内面は横ナデにより平滑化され、粘土紐接合部は不明瞭である。底部厚は有台 A 類に較べて薄く、内面には底部円板と体部粘土紐との接合痕が残り、212 では指頭で強く押さえ、216 では底部中心方向へ向かって強くナデ粘土を引き出すことで接合部をなじませている。底部から体部立ち上がりにかけては回転へら削りがみられ、212 ではさらに弱い不定方向のへら削りを施している。また 212 は肩部以上にサシ目調整を行ない、2 条の弱い沈線を巡らせている。

214 は高台の有無は不明である。体部外面全体にカキ目調整を行ない、頸部には弱く不明瞭な沈線を巡らせている。

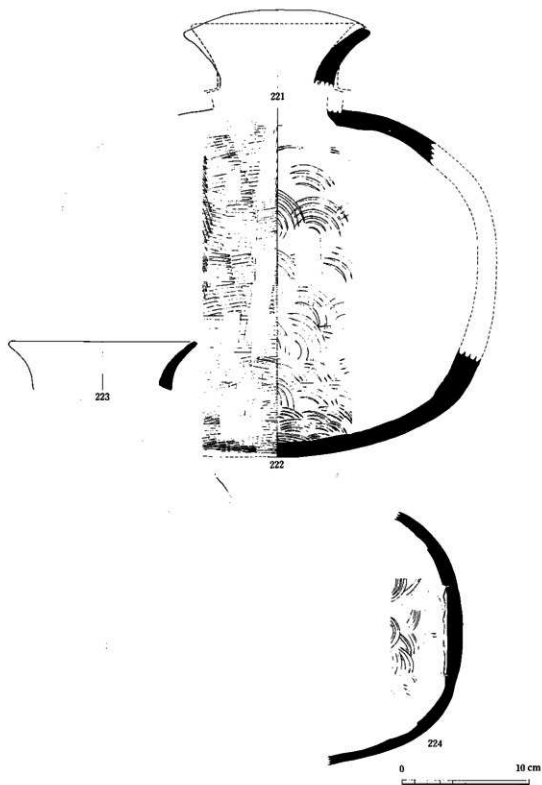
体部と頸部との接合方法は、観察可能な 212~214 の 3 点をみた場合、214 は頸部端に粘土板を当て、接合後頸部内径より一回り大きく穿孔、粘土板を体部に重ね、粘土板を外方に引き出し接合密着する三段接合を行なっている。213 も基本的には同手法を用いているが粘土板を穿孔、断面を調整したのち頸部と接合している点で異なっている。212 では体部と口頸部を直接接合する二段接合を行なっている。すなわち、体部上面を頸部内径よりやや小さめに開口させ、先端が口頸部内面に挿入可能なよう端部を上方に引き出し成形する。(この段階で体部外面はカキ目調整内面は開口部より横ナデ調整を行なっている) 次に体部と口頸部を接合し、口縁より棒状具を差し込み、体部の張り出しが頸部内面に密着するよう押さえナデ上げていると考えられる。接合部外面は頸部端から体部へ粘土を引き出し、接合面を消したのち再度周辺にカキ目調整を行ない仕上げている。

平瓶 (第 17 図 218~220)

大小 2 種がみられるものの口縁部まで復元できたものはない。216 は体部最大径 13 cm、体部成形の後上面開口部(径約 6 cm)を円板で閉じ、カキ目調整後穿孔、口縁部を接合している。217 は体部最大径 16 cm。体部は肉厚で扁平である。底部から体部下部分の一部にかけて回転へら削りを行っている。口縁部は欠損しているが 217 にみられるような緩く開く形状であろう。なお体部上面の加飾の有無は不明である。



第17図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物(9)長頸瓶、平瓶



第18図 柳田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物の横断

横瓶 (第18図 221~224)

体部は叩き成形、カキ目調整である。口縁部は外反し端部は細く引き伸しており、0.5 cm程度の平坦面を有する。

壺 (第19図 225~229)

A類 (225・226)

口径19 cm (225), 13 cm (226)。口縁部はやや外反、端部外面は肥厚し稜をもつ。体部は叩き成形。

B類 (227)

口径13 cm。口縁部は外反し幅約0.7 cmの口縁帯をもつ。体部調整は不明。

C類 (228)

短かく直立する口縁部をもち、口縁端は水平面をなす。体部は叩き成形後、横ナデ、カキ目調整を行って叩き目を消している。

D類 (229)

小型短頸壺。口径11 cm。器高約6 cmと扁平で底部にはへら削り痕を残している。

壺 (第19図 230~260)

A類 (230~235)

口頸部高10 cm前後。口頸部外面を摺揺波状文、沈線等で加飾したいわゆる大甕である。口縁部外面が肥厚するものと、縁帯部に2条の突帯を巡らせ口縁端の稜とあわせて三方向に突出した形状を示すもの(232・233)に大別できる。232は横ナデ調整後、外面は上下方向、内面は横方向にそれぞれハケ状具を用いて「加飾」している。全体に沈線は浅く不明瞭で波状文と同様不規則に乱れたものが多い。焼き垂みがみられるために口径値に関しては232・233を除いては信頼性は低い。

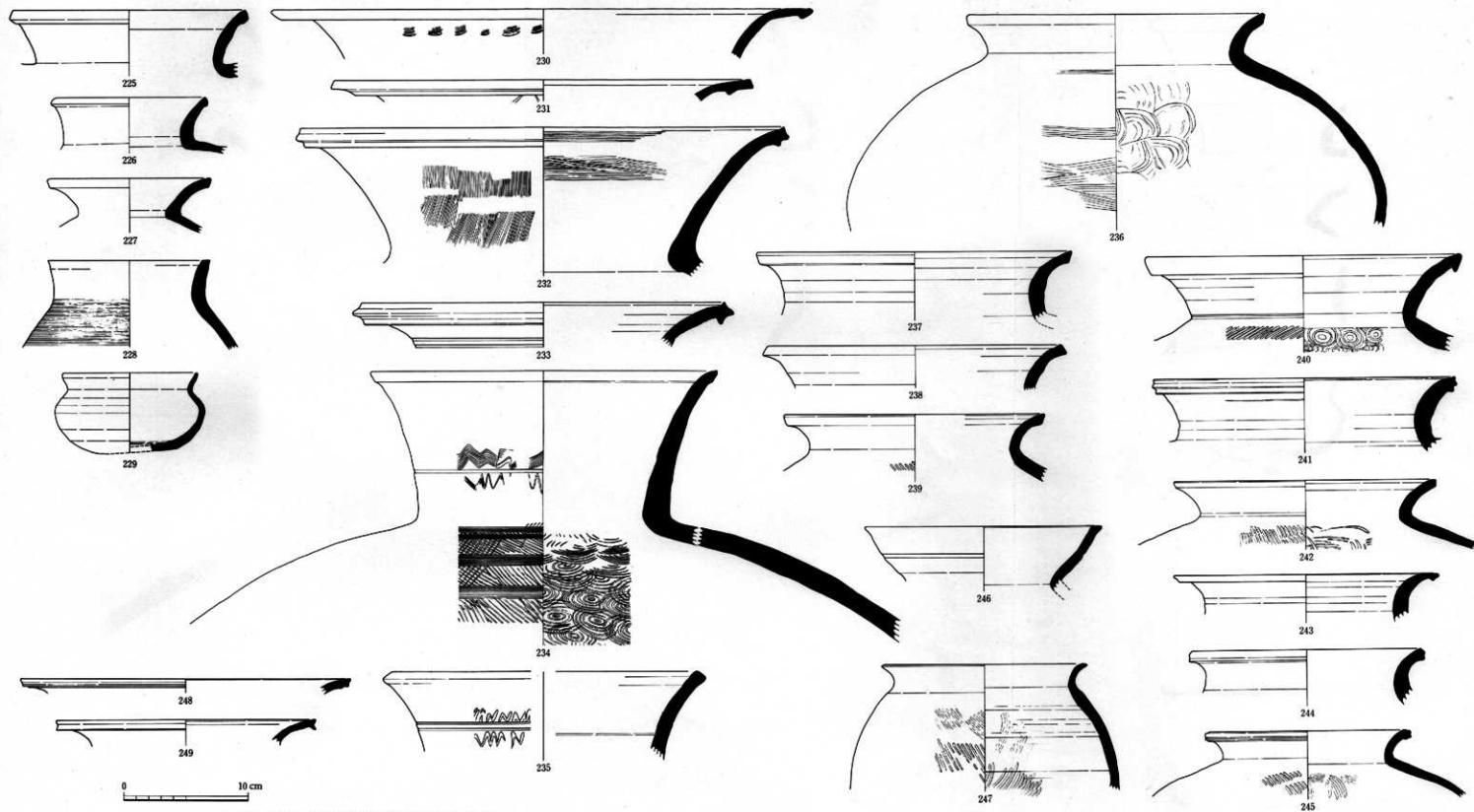
B類 (236~245)

短かく外反する口頸部をもち、口径25~15 cmのいわゆる中型甕である。法量により以下の3群に分かれる。I (口径26~27 cm、口頸部高5 cm前後。236~238、240・241) II (口径22~20 cm、口頸部高3~4 cm、239、242~244) III (口径約17 cm、口頸部高約2.5 cm、245)

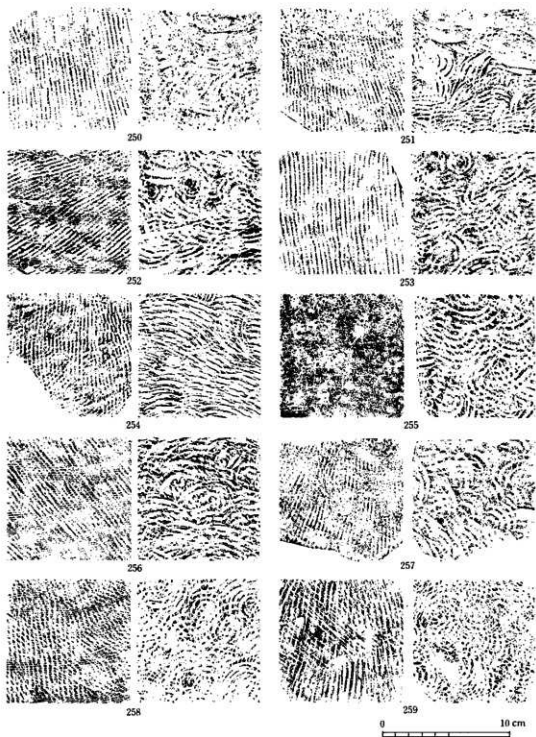
口縁部は稜を持ち、幅約1 cmの口縁帯をもつもの(236~240、242)、縁帯部が下方に突出するもの(240・243)、および縁帯部に突帯を設けた、A類232・233と相似形を呈するものに分かれる。いずれも口頸部は横ナデ調整により、波状文等加飾はみられない。体部外面は平行叩き目、内面には同心円状圧痕をとどめている。236の外面はさらにハケ状具により加飾を行ない、245の体部上半は内外面とも横ナデにより叩き痕を消している。

C類 (246)

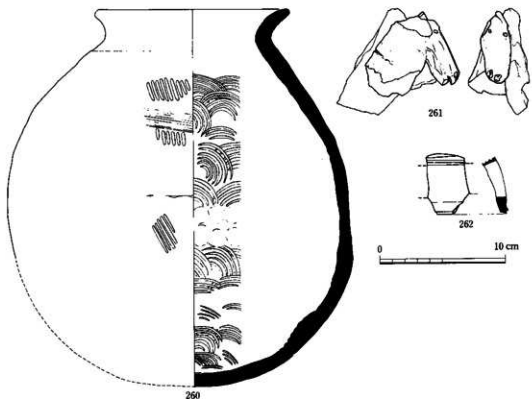
いわゆる直口甕に近い口頸部であり、口縁端は水平面をなす。体部は平行叩き目、同心円状圧痕をとどめる。



第19図 柳田タンワリ1号窯跡灰層出土遺物 (11) 壺、甕



第 20 回 樽出タンワリ 1 号窯跡灰原出土遺物の02壁



第21図 栲田タンワリ1号窯跡灰原出土遺物⑬隻、陶馬、陶硯

D類 (248・249)

甕の口縁としては薄手で外傾が著しいため別器種とも考えられる。

E類 (247・260)

口径約16cm、長胴形の体部と短かく外反する口頸部からなる。いずれも体部は叩き成形によるが調整方法は異なる。247は体部上半から口頸部まで横ナデ調整を行い叩き痕を消している。

260は体部下半がかなり歪む。外面には叩き痕を殆んど残さず底部から体部下半にかけてはへら削り、上半部を粗雑なカキ目、口頸部を横ナデ調整で仕上げている。

陶馬 (第21図 261)

須恵質の頭部片。甕体部片と融着しており、二次焼成を被っている可能性が大。顔面はへら削りによって調整され、目は棒状具の刺突、口はへら状具で刻みを入れ表現している。全体的に細身で写実的な印象を受ける。

陶硯 (第21図 262)

円形硯脚部片。焼き垂んだ小片のため法量の復元は不可能。幅広の透しを待ち、やや外展する。外面はカキ目調整がなされ、透し上方に浅い凹線を巡らせている。

4 小 結

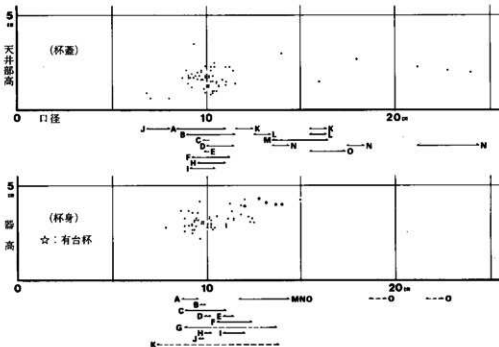
出土遺物量は遺物箱 19 箱分(水洗終了時)重量約 170 kg であった。器種として杯蓋、杯身(有台、無台)、高杯、盤、鉢、甌、瓶、瓶(長頸瓶、平瓶、横瓶)、壺、甕、陶甕、陶馬がみられる。一方提瓶、甕は確認されなかった。各器種の比率を下に示したが、調査区域が中央部の既に破壊された灰原であることや不良品出現率が器種により当然異なることから、これをもって本窯の器種構成を数値化し論じることは不合理であり、また誤解を招きやすい。したがってあくまで参考資料として掲載した。ただ試算した構成比と計測遺物数との間にはそれほど大きな差が現れなかったことから、少くとも計測遺物の取捨選択について各器種間に著しいばらつきは生じていないと考えられる。また遺物の層位的検討も接合状況からみて期待薄となったため本報では言及しないこととし、年代決定に最も有力な杯類について整理したい。

口縁片 + 計測個体数		計 552 点
計測個体数		計 256 点
器種総重量 設定基準重量	杯(蓋) 杯(身) 高杯 鉢 甌 瓶 甕 壺	計約 160 ~200 点
重量	杯等 鉢 甌 瓶 甕 壺	計 173 kg

杯蓋では僅か 2 点 (O 類) を除き他はすべてかえりを待つ。また身は大部分が無台であって、高台杯は細片まですべて計測を行った。第 22 図は計測値の信頼度の高いものについての口径・器高分布(蓋は甕の形態差を除外するため天井部高を使用)と各類の大まかな口径分布を示したものである。両要素の相関関係は弱く、身の器高は 3~4 cm の範囲に大部分が含まれる。蓋は同径であっても各類で差がめだつ。口径では 9~12 cm の小形の無台杯、有返蓋が主体をなし、14 cm を越える大形品は少ない。他に蓋 J 類とした径 7~8 cm、対応する身の口径値が 6~7 cm の極小品も製作されている。有台杯の口径値は最小で 12 cm、多くは 13 cm 以上である。

有返蓋と無台杯が対応する小形品では、身の場合口径 9~10 cm と一回り大きな 11~12 cm の 2 群がみられる。ただ蓋は前者と対応するものがほとんどで、後者に対応すべき口径 12~13 cm のものは十分に抽出し得なかった。これら小形品では大部分は法量分化が認められず口径分布は連続的であり、その形態は変化に富む。対応関係をおさえられたものに蓋 B-a 類・身 C 類(重ね焼き)、蓋 B-b・c 類・身 D 類(調整・胎土)がある。また A 類は共に形態が古相を呈する一群で一般的には対応すると考えられる。ただ体部が内湾する身 K 類のうち 161 の胎土・焼成・色調が蓋 4・8・10 と酷似しており、この対応も否定できない。とすれば身に K 類中特異な調整や口径値の異なる d~8 類を除いた b・c 類が蓋 A 類のいずれかと対応する可能性もある。これら小形品は現段階では判断資料がなく今後明快な資料による分類に期待したい。

口径 13 cm 前後の蓋 (K-I・L-I) は無台、有台両方への対応を考えねばならないが、前述した通り計測数が少なく実態は不明である。



第22図 柳田タフワリ1号窯跡出土杯類の口径・器高(天井部高)分布

有台杯は出土量が少ない割に形態・法量にばらつきがなく無台杯に較べ緻密に作られている。したがって底部のみのO類についてもM・N類の口径・高台比をもとにある程度まで口径を復元することが可能である。これから推定した場合、183~185は19cm前後、186では22cm前後の口径値を得る。したがって高台杯O類は蓋N-II・IIIと対応する可能性が大きい。

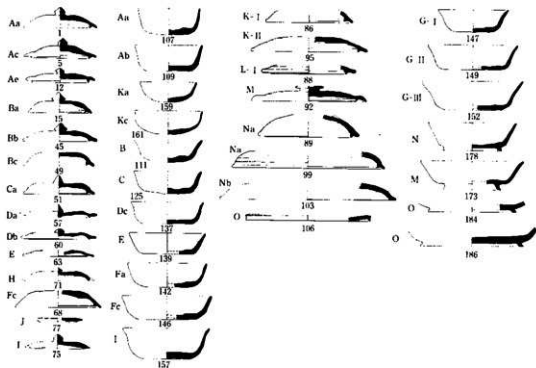
大形品の特徴として法量分化がみられること、蓋では小形品の相似形が少なく独自の形状を有することがあげられる。特に受け部の形状はK・L類を除き独特である。また口径16cm前後の無返蓋(O類)も認められた。K・L類は口径分布でもM・N類と異なっておりK類については後出的な形態である。

本窯出土杯類のうち小形品は柳田五郎兵衛山1号窯出土品に類似点が多い。同窯計測遺物と直接対比したところ、蓋では本窯B-a類類似(かえり矮小)1、B-a又はb類(焼成形態不明)1、B-c類類似1、F-c類2、類例なし1、身では形態はA類であるか底部外面未調整2、C類1、C類類似(底部外面に粗雑な仕上げ調整)2、F類類似1、類例なし1点という結果を得た。田嶋明人氏は同窯杯類の様相として、器肉の凹凸がほとんどなく滑らかに外反する体部(杯身)を新しい製作手法の導入によるもの推定しつつ、ヘラ削りの多用や形態で必ずしも後続型式と一致しない点をあげ該期の製作手法を特徴づけている。このことは的を得た見解であり、本窯小形杯類の分類において基本的指針とした。

本窯ではさらに底部が肉厚ながら体部が外反するI類や蓋H・K類、身G類、有台杯(M類に顕著)のように全体に器肉が薄く均一化した一群が含まれる。後者ではほとんどに法量分化がみられる。しかし蓋M・N類、身K-f・K類等有台杯を除く大形品が肉厚であり、同様に無返蓋

についても口縁端付近まで回転へう削りを行っており、後続型式に一般的な丸みを帯びた流麗さを欠いている。それゆえ高台杯、無返蓋、および身G類等にみられる一般的後出要素をもとに本窯出土遺物に型式差を与えることは窯体未調査の段階では早計であろう。したがって現段階ではこれらを一連のものとして扱い、型式的細分は将来に委ねたい。大胆な推測をするならば、本窯の操業期は新器形の移入や日常雑器の製作開始に伴う試行、模作が錯綜する一連の段階であり、その過程において個体差に富んだ独特の形態が生じたのではなかろうか。また、このような背景の産物として窠E類とした土師器煮沸形態と類似した特異なものも製作されたと理解したい。

最後に本窯の操業年代について触れたい。宝珠鈕の単独出現以降、7世紀代の窯跡調査例は北陸で僅か3例^{注12}であり、その中で柳田五郎兵衛山1号窯を除く2例がいずれも飛鳥IV期に比定されるため、窯跡による編年の組み立ての段階には至っていない。ただ本窯は柳田五郎兵衛山1号窯と操業年代が重複し、同窯出土遺物の器種、形態は本窯のそれにほぼ包括できると考えられる。当地の窯編年が不十分な状況で陶邑窯跡群との対比を行うことは問題が多いが、本窯出土遺物は中村編年III型式2段階、田辺編年III期TK 46型式に比定される。さらに飛鳥・藤原宮跡の編年では飛鳥III期のやや新しい段階に比定される。実年代についても当地の編年が不十分なため7世紀第3四半期と幅を持たせたい。



第23図 柳田タンワリ1号窯跡出土杯類の組成

V 柳田ウワノ1号窯跡

位置・現状

柳田町通称ウワノに所在する。本窯跡の立地する斜面は西出川により形成された開析谷中、東端のものといえ、上流約200mには五郎兵衛山窯が立地する。また本窯構築斜面頂部平坦面には前方後円墳を含む柳田ウワノ古墳群が占地している。

現在、本窯付近の斜面は中腹付近を境に下部は極めて急傾斜となり一部岩盤の露呈もみられる。この斜面には標高32m付近に小規模な用水路・作業道が設けられているが、この法面では灰原が認められないことより、本窯は中腹よりやや下部にみられる傾斜変換点と用水路付近(標高25~30m)の範囲に存在すると考えられる。掲載遺物の大半は谷底付近の崩落土から採集した。

採集遺物 (第24図1~20)

採集遺物には明らかに時期の異なる杯蓋13を含む。したがって複数の窯跡の存在は確実であるが僅か1点のため本書では上記地区発見の窯跡はウワノ1号窯で代表させることとした。遺物の大半が甕胴部片である。資料が乏しいため細片に至るまで大胆に図上復元を行なった。

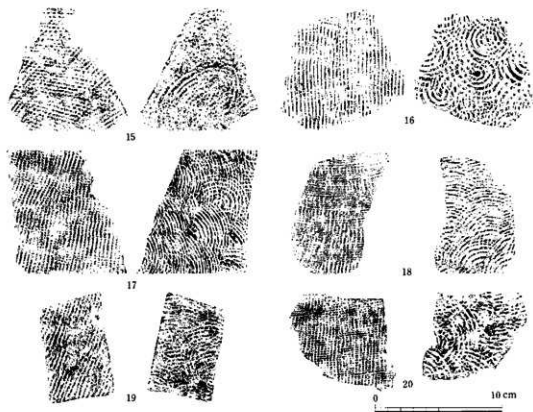
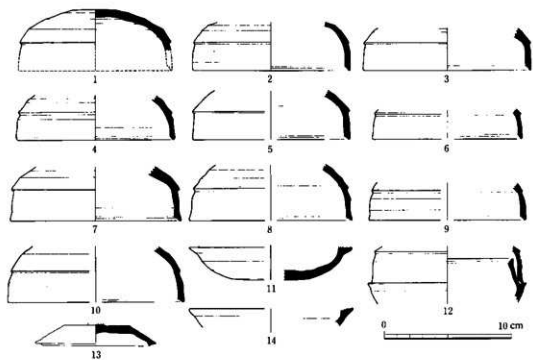
杯蓋をみた場合、口径分布は焼き歪みをもつ細片ゆえの計測誤差を含むものの11.5~14cmと個体差が認められる。また口縁高は2.0~2.2cm(1・6・9)、2.5~2.6cm(7・8・10・12)の2群(A・B類)に分別し得る。天井部は3/4~4/5と大部分に逆時計回りヘラ削りがみられる。天井部と口縁部の境の稜はA・B類とも短かく、A類では鋭さを残しているもののB類では全体的に鈍く、8・10では顕著である。また8・10の口縁端は外方へやや膨らんでいる。口縁端面はA・B類ともに内傾し大部分には凹線が施されている。ただし段状を呈する3や殆んど認められない4など上記A・B類に関係なく個体差が大きい。

杯身は資料が極めて貧弱で全体を把握し得ない。蓋と融着した12のたちあがり端部は内傾した平坦面を持つ。また13の底部はやや扁平で4/5に時計回りヘラ削りが行なわれている。

採集遺物に関する年代観は第八章に記す。

第3表 柳田ウワノ1号窯採集遺物計測表

番号	口	経	受部径	口縁高	ヘラケズリ	焼成	胎土	色(外面/内面)
1	12	推			→ 3/4	やや不良	ややく 0.1~1.5mmの 白色砂粒を多く含む	灰黄褐色 / 灰褐色
2	12.6	復		2.3	?	良好	ややく 0.1~1.0mmの 白色砂粒を多く含む	青灰色 / 明青灰色
3	13.1	復		2.2	→ 2/3	やや良好	ややく 0.5~2.0mmの	明オリーブ ア灰色
4	12.4	復		2.3	?	良好	ややく 0.1~1.0mmの 白色砂粒を多く含む	暗オリーブ灰色 / 青灰色
5	13	推		2.3	?	"	" 0.1~3.0mmの	オリーブ灰色 / "
6	12	推		2.0	?	"	" 0.1~1.5mmの	緑灰色 / "
7	13.4	復		2.5	→ 2/3	"	" 0.1~2.0mmの	明緑灰色 / "
8	13	推		2.6	?	"	ややく 0.1~1.0mmの 白色砂粒を多く含む	オリーブ灰色 / 灰白色
9	12	推		2.0	?	"	ややく 0.1~2.0mmの 白色砂粒を多く含む	緑灰色 / 青灰色
10	14	推		2.5	→ 3/4	"	"	オリーブ 灰色
11	?		13 推		→ 4/5	やや良好	" 0.1~0.4mmの	明オリーブ灰色 / 青灰色
12	11.8	復		2.6	?	良好	" 0.1~1.0mmの	暗オリーブ灰色 / 青灰色
(身)	10.2	復		?	?	"	"	/"
13	10	推			→ 1/2	"	ややく 0.1~1.0mmの 白色砂粒を多く含む	暗緑灰色 / "
14	?		13 推		?	"	"	暗青灰色 / "



第24区 柳田ウツノ1号窯跡採集遺物

VI 柳田テンジク 2号窯跡

位置・現状

柳田タンクリ1号窯の西約50m、谷を挟んで同1号窯と対峙する位置に存在する。本窯の立地する斜面頂部は中段丘面が広がり、前端幅、奥行きとも約200mを測る三角形の平坦地となっている。戦後の開墾の際、本窯付近の斜面は切り盛りによって階段状の耕地が造成されたが、現在は荒地化している。

分布調査の際、上記法面に灰原の一部が露呈した状態で発見された。露呈部は砂防堰堤による堆積範囲よりかなり高位の私有地であり、埋没の恐れはない。ただし灰原裾が土砂堆積範囲に延びる可能性もあり、確認のため私有地内で試掘を行なったが、灰層は認められず、畑の盛土中より若干の須恵器片を検出したにすぎず、灰原は工事影響範囲までは延びてはいない。なお本窯跡、特に灰原部に関しては、開墾によりかなり損傷を受けているとみられる。

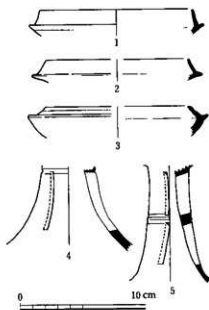
遺物 (第25図1~5)

試掘坑、および付近での表採により破片約20点を得た。確認した器種は、杯、高杯、広口壺、甕であった。ただし全て細片のため、図化し得たものは杯、高杯に限られた。

1は口径12cm(復元値)。焼き歪みは殆んどない。立ち上がりは短かく内傾し、立ち上がり高は1.2cmを測る。また受け部上面には凹線が1条巡っている。2・3は歪みが著しく口径不明である。4・5は高杯脚部であり、ともに丁寧なつくりの二段三方透しをもつ。4は有蓋、5は無蓋高杯と推定される。

年代

出土資料が少なく、採掘年代を求めることは困難である。ただ第25図掲載のものについては6世紀末葉頃といえる。



第25図 柳田テンジク2号窯跡出土遺物

VII 柳田浅畑 1号窯跡

位置・現状

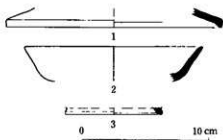
タンワリ1号窯跡上流約240m、灌漑用のため池堰堤左岸に位置する。築堤のため土取りが行われ、崖面に窯体断面が露呈、窯体下半より灰原まではすでに破壊されている。本窯跡は砂防工事影響範囲外ではあるが分布調査により新たに確認したものであり、ここに掲載する。

遺物 (第26図)

窠体断面で発見した3以外は表採品である。杯蓋1は口縁から天井部へはなだらかに移行し、境での稜や平坦面はない。内外面とも横ナデ調整。3は剝離した貼り付け高台、小形で外側へ張り出し外端で接地する。

年代

採集遺物が僅少かつ細片であり、今後の資料の増加に待つところが大きい。杯蓋1に関しては8世紀前半代に比定できると考えられる。



第26図 柳田浅畑1号窠跡採集遺物

VIII 結 語

市史編さんに伴う柳田五郎兵衛山1号窠の試掘調査から約10年が経過した。この間本窠跡群の重要性は認識されつつも、踏査活動が伴わず検証はほとんどなされなかった。近年地元研究者および当センターの分布調査が進み、徐々にその実態がわかりつつある。タンワリ1号窠については、集中する緊急調査への対応に迫られたこと、周知の遺跡が付近に所在しなかったことから開発工為との事前調整段階で抽出されず、工事が着工された事は事実である。ただ、本窠の立地は当時の我々の予想を越えたものであり、現地形に恐わされることのない着実な分布調査の必要性を示した点で苦い教訓を残したともいえる。

おわりに当窠跡群の分布状況および作業期間について、現段階での事実関係を中心にまとめておく。

1 柳田ウワノ1号窠は当窠跡群の開窠期を示すものである。A類については全体的に丁寧かつシャープなつくりであり、B群に比べ口径値もやや小さい。このことは深沢1号窠出土品との比較でも指摘される。したがって本窠の築窠は深沢1号窠よりやや先行するとみられ、陶色窠跡群の編年と対比した場合1期TK47型式¹⁶に比定される。

2 古墳時代の確認窠跡は柳田ウワノ窠を除き、柳田テンジク2号窠(6世紀末葉頃)、同テンジク1号窠¹⁰(7世紀初頭)、同シャコテ1号窠、および柳田五郎兵衛山1号窠、同タンワリ1号窠の5基である。テンジク2号窠出土品は加賀市分校3号窠に比定できる。シャコテ1号窠は詳細分布調査事業により発見されたものであり、柳田シャコテ遺跡南端の低位海岸段丘崖の裾に立地し、窠体の一部が残存する。

採集された広口壺から見て、6世紀末葉～7世紀初頭頃と推定される。

3 柳田浅畑1号窠跡の発見により、8世紀中葉頃までは本窠跡群が継続的の作業を行なっている



第27図 柳田シャコテ1号窠跡採集遺物

ことが明らかとなった。また、中越照次氏は寺家町谷内川大池付近で平安中期とみられる須恵器窯跡を発見した。一方、寺家遺跡出土遺物（9世紀代）の一部について胎土分析を行った結果、それらの産地が高松・押水窯跡群と推定された。胎土分析については、付章で述べられたように、各窯跡群あるいは地域単位の産地推定が可能となり、産地同定の極めて有力な武器となり得る。現段階では消費地の資料数が少なく確定できないが、本窯跡が平安時代初め頃までには解体し、高松・押水窯跡群に一本化され、一郡一窯跡群となる可能性を示唆しており、今後分析試料を吟味し検証を進めたい。谷内大池発見の窯跡については、須恵器生産の衰退段階における一般的傾向の一つと考えたい。

- 4 本窯跡群の分布範囲は、中越氏の発見にみられるように、柳田地区にとどまらず、おそらく隣接する寺家、一ノ宮地区にも拡大する可能性が大きい。したがって県内各窯跡群の名称にちなみ「羽作窯跡群」柳田支群とすべきであろう。

- 註1 藤 則雄 1973 「羽作の地形と地質」「羽作市史 原始・古代編」個別編第1章第1節 羽作市役所
- 2 註1に同じ
- 3 能登海浜道路（縦貫2期）建設工事に伴う緊急発掘調査として、寺家古地道跡ムカイダ地区（昭和52年）、同ブタイ地区（昭和53・54年）、寺家遺跡祭祀（排水）地区・同太田地区（昭和53年）、寺家遺跡砂田地区（昭和54・55年）、柳田シャコデ遺跡（昭和54年）があり、また同工事に関連する団地公園場整備事業に伴ない寺家古地道跡チョウエイジ地区・オオバタケ地区（昭和52年）の緊急発掘調査が行われている。（調査主体 県教育委員会文化財保護課、県立歴史文化財センター、羽作市教育委員会（県教委職員派遣））
- 4 小嶋芳孝 1981 「寺家 1980年度調査概報」石川県立歴史文化財センター
- 5 註4に同じ
- 6 谷内尾吾司 1973 「柳田うわの遺跡」「羽作市史 原始・古代編」個別編第2章第2節第1項
- 7 河村好光 1982 「瀬古墳群」「石川考古学研究会々誌」第24号
- 8 田嶋明人 1973 「柳田古墳群」「羽作市史 原始・古代編」個別編第3章第1節第6項
- 9 註4に同じ
- 10 田嶋明人 1973 「柳田古窯跡群」「羽作市史 原始・古代編」個別編第3章第2節第2項
- 11 「羽作史 原始・古代編」674頁第1図1～14
- 12 富山県富山市金草1号窯跡、石川県鹿島郡鳥屋町深沢4号窯跡、及び柳田五郎兵衛山窯跡の3基である。他に表採等によって確認されているものに、富山県小矢部市西蓮沼、同蓮沼新地窯（瓦陶兼業窯）、同山王奥地窯（瓦陶兼業窯）以上富山大学考古学講話会資料（No.19）1981 石川県能美郡辰口町湯屋窯B支群（瓦陶兼業窯）金沢大学考古学研究会活動報告第3号 1981、同輪島市稲舟窯 石川考古学研究会々誌第10号 1966、同羽作郡押水町榎屋町窯があげられる。ただし後2窯については、現在所在地は不詳である。
- 13 中村 浩 1981 「和泉陶器窯の研究」
- 14 田辺昭三 1982 「須恵器大成」
- 15 奈良国立文化財研究所 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告II」
- 16 第3次石川県古窯跡（鳥屋町深沢窯跡）発掘調査事業
- 17 石川県立大聖寺高等学校郷土研究部 1973 「分校発掘調査報告」「郷土」11
- 18 同一窯跡群内でも付章に記載したように、シャコデ窯とその他で異なることがある。両者で異なる点として、前者は低位段丘、後者は中位段丘に立地することがあげられる。原土採取地等の問題を含め検討していきたい。
- 19 吉岡康暢 「北陸の須恵器」 1974 『世界陶磁全集』2



柳田タンワリ窟跡周辺地形 (1970年 セントラル航業株式会社撮影)



柳田台地俯瞰 (1981年撮影)



柳田タンワリ1号室跡俯瞰 (南方より)



近景 (工事残土除去後)



表土除去、灰原検出段階



灰原遺物出土状況 (7-H・1、8-H・1グリッド等 北西より)



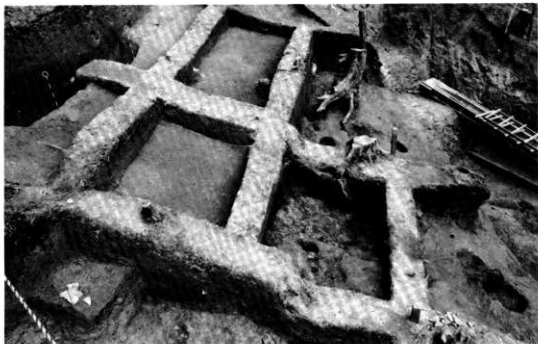
灰原遺物出土状況 (7-Hグリッド)



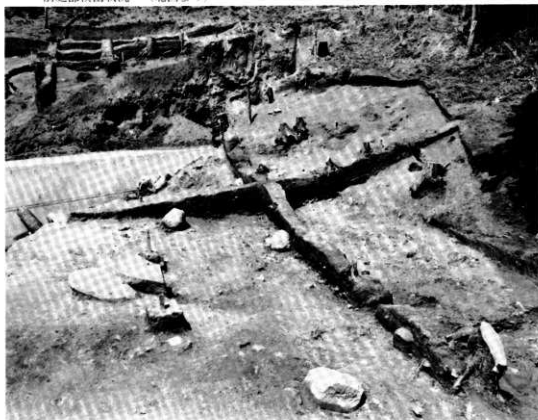
灰原基盤 (4-D・E、5-D・Eグリッド等 南西より)



灰原基盤 (5-Eグリッド 南西より)



前庭部検出状況 (北西より)



灰原土層断面 (8ライン、1ライン 南西より)



灰原基盤 (西より)



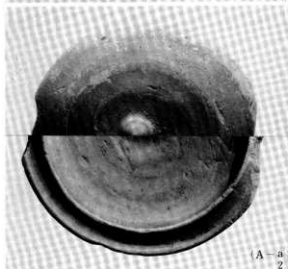
調査参加者



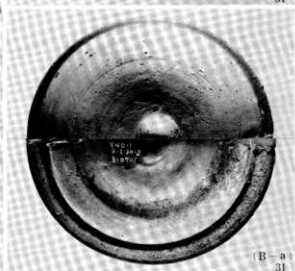
(A-a)
2



(B-a)
31



(A-a)
2



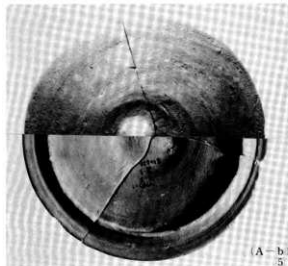
(B-a)
31



(A-b)
5



(B-a)
重14匁
30
122
29
117



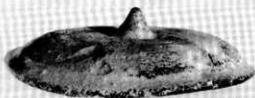
(A-b)
5



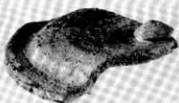
43



43



(C-a)
51



(D-b)
60



(C-a)
51



(D-b)
60



(F-c)
68



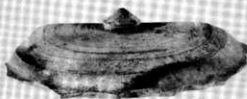
(D-a)
57



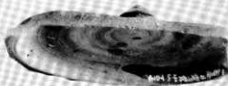
(F-c)
68



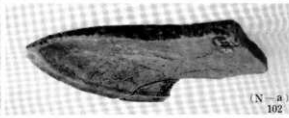
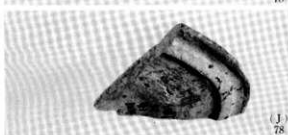
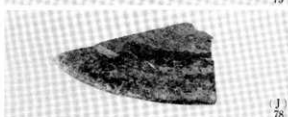
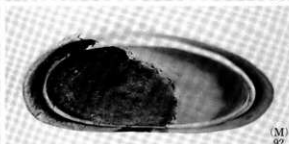
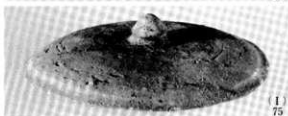
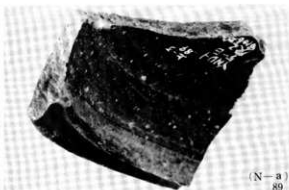
(D-a)
57

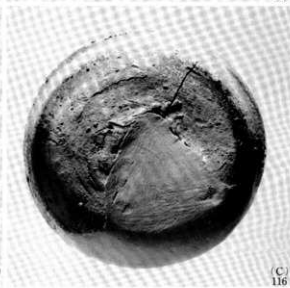
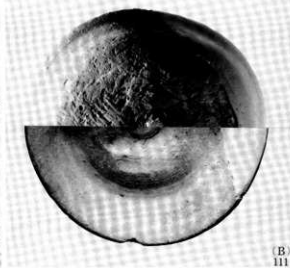
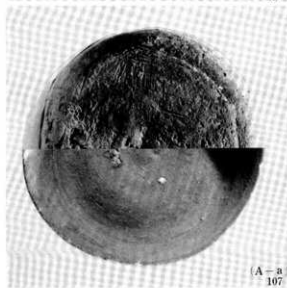


(H)
71



(H)
71







(C) 119



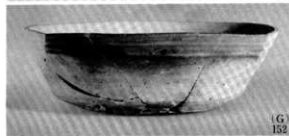
(J) 158



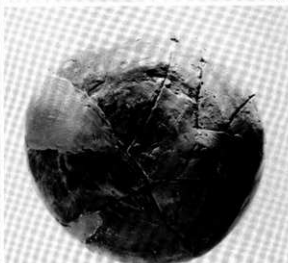
(C) 121



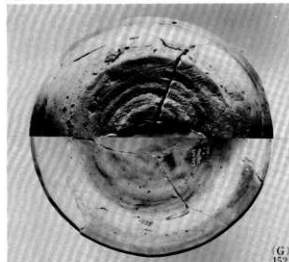
(K) 161



(G) 152



(K) 161



(G) 152



(K) 167



(H) 153



(K) 167



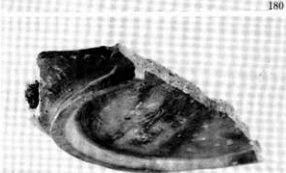
(N)
178



(N)
178



(N)
180



(O)
186



187



189



190



191



193





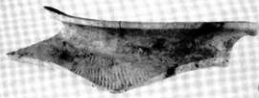
(A)
234



(B)
239



(E)
260



(B)
242



(B)
245



(A)
232



(F)
247 表



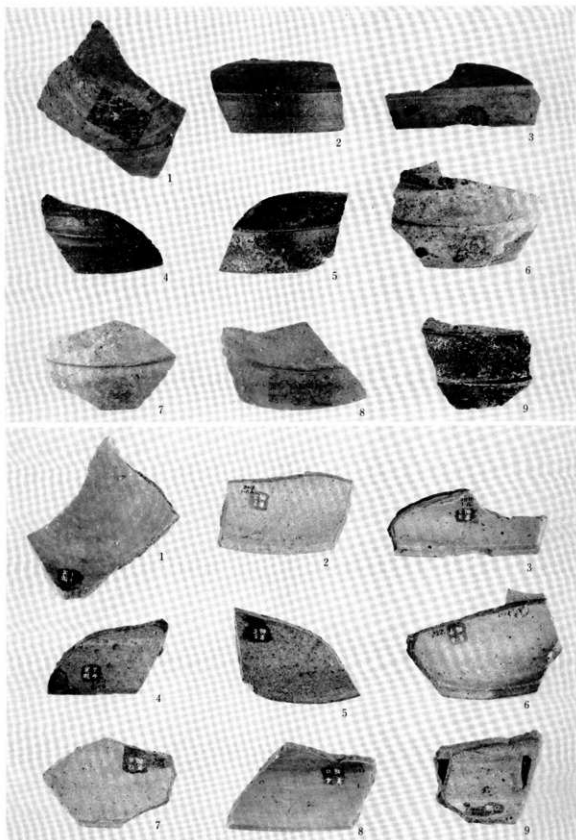
(E)
247 裏



261



261



柳田タンワリ1号窯跡

西出川通常砂防工事（予防）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 1982年3月31日

発行者 石川県立埋蔵文化財センター
金沢市米泉町4丁目133番地

印刷者 榑橋本確文堂
金沢市大手町2番35号